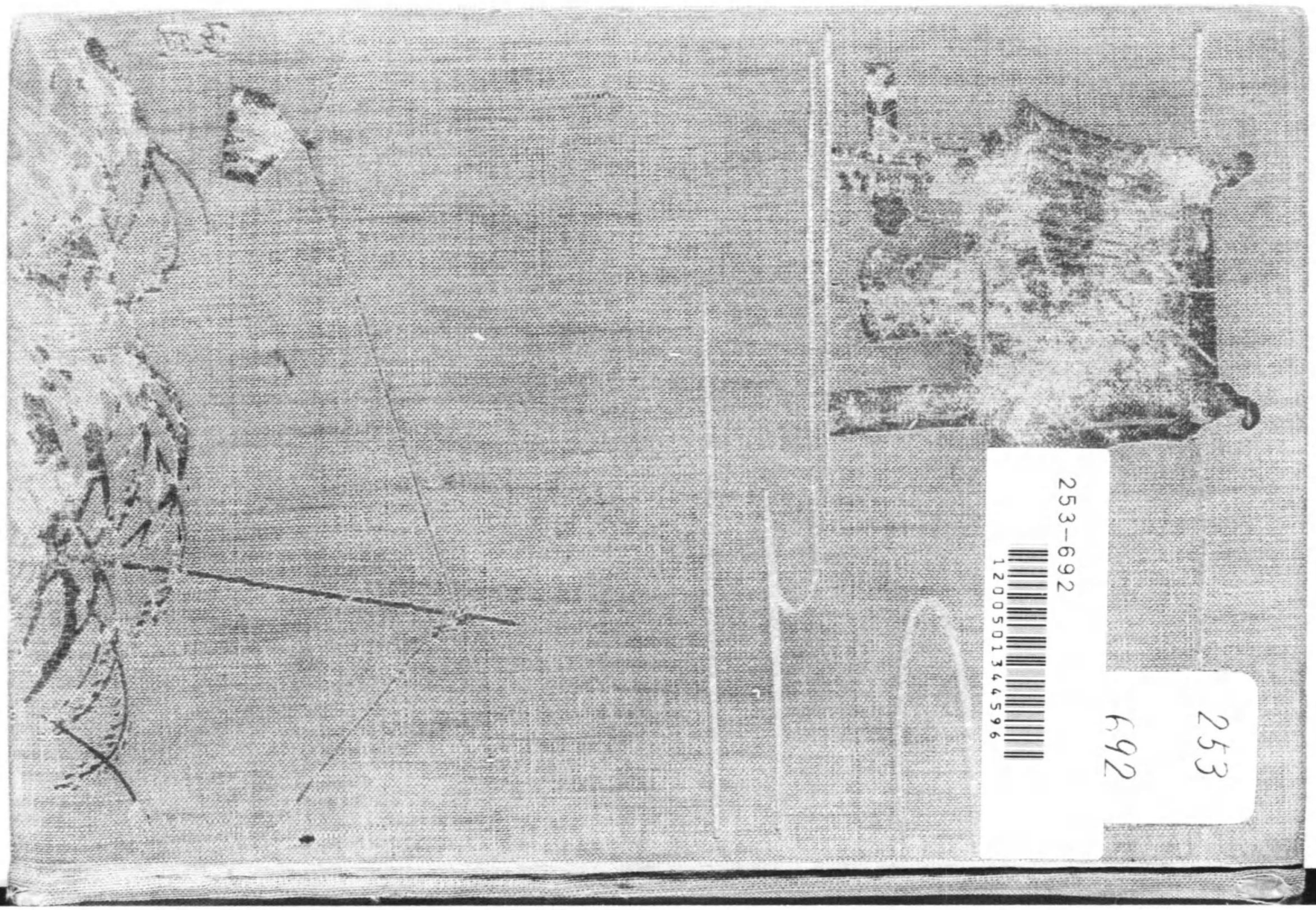
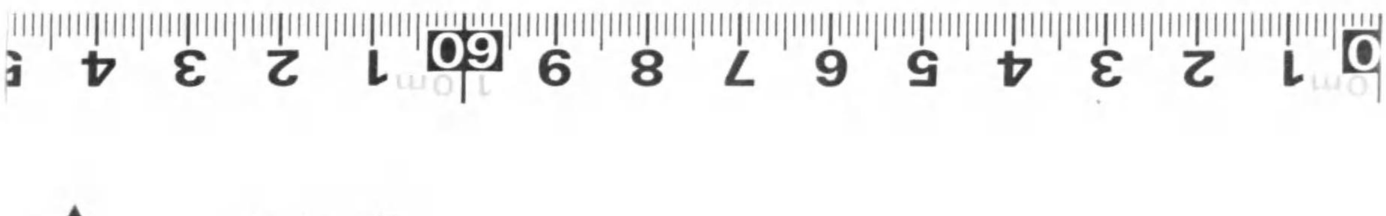
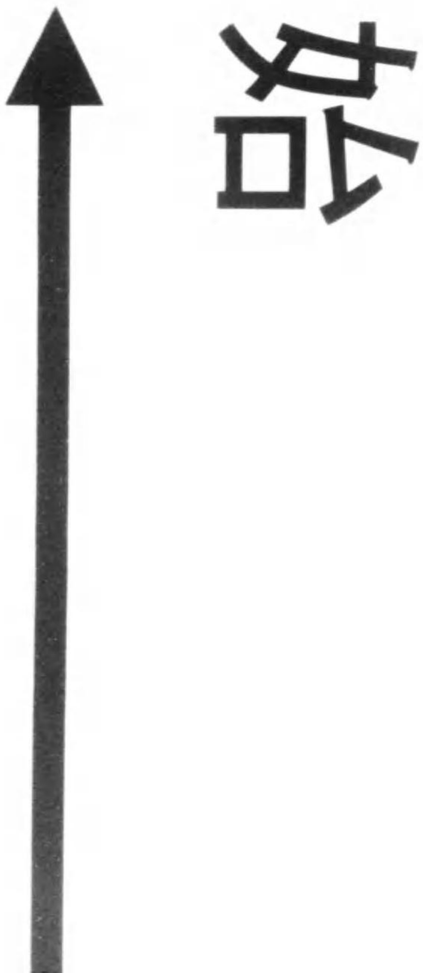

253
692
253-692
12005013445 96




背

492

前田若尾著

教育と實際

帝國圖書館藏

283-692

自序

私が自分の所感を公にしようと考へることは、我ながら大膽極まることと思はれます。然し目下、小さいながら、一つの女學校の經營者として、校長として、數百の生徒に接し、且その家庭のお母様方に、直接なり間接なりの交渉をもつてゐるといふことを考へます時、私の立場から色々聞いて戴きたいことも起つてまゐります。然し私が、そのお母様に御相談しお願したい事は又、お母様としての全婦人に聞いて戴きたいことだ、と考へます時、私は自分の學歴境遇等より起る僭越といふ聲を省る暇のない程、切迫した心持を以て、この文を綴ります。幸に他山の石となるを得ば幸甚と存じます。

私は今、自叙傳を書くつもりはありません。功罪ともに棺を蓋うて後事定まるべきものと信じてゐますから。然し勢、さういふ風なことに筆が走りましたら、それは自分の本意ではないといふことを、承知して戴きたいと存じます。

尙、一度多數の方のお耳に入りお目にふれたものなども、やはり所見の一つとして、この中にかゝげることに致しました。讀返して物足らぬ處などもありますけれど、元來筆の人でない私が、多少の言葉の末を修正して見ました處で、見るべきものにもなりますまいし、且所信は今に至つても變つては居りませんから、すべてそのまゝにしておきます。淺學菲才のものがましさはお許下さいまして、十分の御批評を戴きましたら、有難いことと存じます。

二十餘年の昔、大患の爲一度死して甦りしことは、私を精神的にも更生せしめたものでありました。そしてかの大震災の日には又、保土ケ谷絹撚會社女

工寄宿舍で、崩壞した建物の下に呻吟しながら、二度天日を仰ぐことが出來るやうになつたことは、自分ながら不思議に堪へません。私はこの二つの奇蹟を追想するごとに、天が何等かの使命を私に下されたものと、信じないわけにゆきません。今日この更生記念日に當り、今もなほなま〳〵しき思出を前にしてこの筆を執りはじめます。

紀元二千五百九十三年九月一日

前田若尾識す

教育と實際

目次

大自然の威力とその恩惠……一
私は一生旅行する……三
いづれが親心……九
愛の極致……一九
子を持つて知る子の恩……四六
それもさうだが……五三
教育の効果……六一
何を標準として子女の學校を選ぶべきか……七五
家庭教育の權威……八三
傳統の力……一〇〇
お母様へのお願(その一)……一一〇
お母様へのお願(その二)……一一八

針の供養について……一二八
七夕祭について……一三三
こんな娘さんならお嫁さんに世話したい……一四四
姑と嫁と……一五四
職業の尊重……一五九
私の運動競技觀……一七七
櫻蔭グラウンド開きに臨みて……一八六
貞操觀……一九三
お能拜見……二〇六
曾我廼家五郎氏と談る……二一六
不景氣風……二二〇
農村の處女に與ふ……二三八
婦人と經濟思想……二四八
綿花亡國……二五七

大阪婦人に望む……二六二
飛行會館の一夜……二七四
社會の不安と教育者の立場……二八四
女學生と新問……二九一
女學生と暑中休暇……二九四
社會へ巣立つ女子に贈る言葉……二九八
全女學生同盟……三〇〇
教員室の空氣……三一四
女教員會傍聽席より……三二二
目黒區女子青年團設團式祝詞……三二七
記念日を迎へて子等に諭す……三三二
恩賜金拜戴を忝なみて……三三七
工場主に望む……三四一
水久保澄子に與ふ……三四六

アパート是非……三五三
國語の尊重……三七
弱きものよ汝の名は人なり……三六一
試驗地獄につき……三六六
自然にかへれ……三七三

教育と實際

大自然の威力とその恩惠

我々日本人は、皇祖天照太神を日の御神と信じ、太陽に向つてこれを尊みこれに感謝し、かくして三千年を閲し來つたものであります。氣候にも風物にも、天惠豐かなる國土に、生れ育ち、大自然に對する感謝と信仰の念は、親より子に子より孫に傳へられ、今日に及んでまゐりました。山川の靈、風雨の神より、一木一草の末に至るまで、我々の周圍は、常に我らに庇護を垂れ給ふものと考へる時、八百萬の神々の、絶大なる威力とその恩惠を體驗してゐたのでありました。然るに智惠の木の實を食ひ、我と我身を顧みた時、すべての信仰は消えてしまひ

ました。日の神と思つたのは、太陽系中の中心をなす一星に過ぎませんでした。日出日沒は自分の眼の迷、早起して日の出を拜むのは、無意味なことでありました。靈山と考へられたものは、土塊の蓄積に外ならぬ。自分の好むがまゝに登り踏み、荒しまはつた擧句、山嶽を征服したと稱して、後足に砂を蹴立てゝ、下りて來てかまはないのでした。天を父とし地を母と考へることは迷信であつて、土壤は一部農家にのみ必要であると考へると、ガス・水道・地下鐵、掘つて掘つて原形を留めぬ樣にしてしまふことになります。コンクリート、アスファルト、ペーブメント、人工の限を盡してこれを化粧するのを、現代人の誇と考へてしまつてゐます。神鳴樣は何といふ古風な言葉だらう。我々は生活の爲に、日夜これを驅使してゐる。かういふ風に我々が威張り散した結果、天を懼れない人間が、出來上つてしまひました。申譯のないこと勿體ないこと、そんな思想は、前世紀の遺物だ。人は動物である。動物中最えらいものである。動物的慾望は最旺盛なるべき筈である。然し生命は僅に五十年、死んでからどうならうが、自分の知つたこ

とではない。刹那的快樂、それが我々にとつて、最大切なものである。親だつて人間だ。師だつて自分達よりどれだけ優れてゐるものでもない。惡いことをしても、巧妙にやれば、二年や三年わかりつこはない。喧嘩したら、相手をぶち殺せばいゝ。切迫つまつたら三原山だ。これが近代的の人間の見本の樣に考へられてゐる今日であります。

私は、原始時代の樣に、あらゆるものを神祕的に見ることが、本當だ、といふのではありません。いつまでも、無智蒙昧であれ、といふのではありません。科學的研究によつて、天與の人智の及ぶ限を盡して、その秘庫を開くことは、進化すべき使命を持つたものゝ、當然の義務であります。然し畢竟、人は大自然によつて生れ、はぐくまれたものに過ぎません。如何に大自然が、何ものをも見せよう聞かせようとあせつても、猶且知悉し得らるべき筈はありません。それを科學萬能と叫んで見たり、淺い心理作用によつて得たものを、すべてだと誤る事は、實に冒瀆の甚しいものと信じます。畏敬によつて、信仰によつて、はじめて一部

を體得し得らるゝ神祕を、永遠の神祕としておくべきものではないでせうか。私は大自然の威力とその恩惠とを信じ、すべての點にこれに順應して行くこと以外に、人の道はない、と信ずるものであります。

紀元二千五百八十三年九月一日、突如、大地は激浪の如くに搖れ動き、建物は俄然崩壞しました。人は我先にと安全の場所を求める爲、最恐るべき火の仕末を忘れ、遂に未曾有の大火災が起つたのであります。東京は、横濱は、その附近は、殆ど焦土と化しました。然もこれは、我々を呼び覺す一つの警鐘でありました。絶大の威力を示された大恩惠でありました。この時震災の洗禮を受けたものは、等しくこれを天譴と呼びました。

その頃、私は、神奈川縣保土ケ谷の絹撚會社に、女工取締として勤務してゐました。土曜日の午後には、一部の外出を許すことになつてゐましたが、丁度その日であつた爲、事務所に這入つて來た二人の女工を前にして、私は金を兩換して

渡し、次に二階に寢てゐる病人のためにと、調へてあつた粥の鍋を持つて立あがり、階段に足をかけた刹那、大音響と共に家はつぶれてしまひました。水田を埋めて周圍を煉瓦で圍んでゐる建物は、實に一たまりもなく、崩壞してしまつたのでした。あわてゝはいけない這つて〳〵と、思はず大聲を擧げましたものゝ。横たふしになつた私の右足の上には、梁が落ちて來て動くことが出來ません。暗黑裡に思はず瞑目すると、助けてくれの聲々、先生先生の叫が、遠く近く四方から聞えて來ます。ふと炊事場の火のことが頭に浮びました。今や盛に燃えてゐるあの多數の大竈の火が、若し他に移つたならば、この大建物に火災が起つたならば、この中にゐる多數の人——逃げ遲れて埋められてゐる人のすべては、燒死しなければならないのであります。又この急の場合、幾人の人が建物の外に出られたかを考へると、本當に心配で足一本を切り離してでもと、有たけの力でもがきました。その間にも、助けてくれ先生先生〳〵の聲は聞えて來ます。私はもがいても自由になりません。足への重みは刻々に加はつて來ます。痛はひどくなりま

す。あゝこのまゝ、私が苦痛に堪へかねて、意識不明になつたなら……、私はそれこそ心からの祈を捧げました。私はどうしてもこのまゝ死ぬことは出來ない、と思つてゐるその間の時間の長さ！永遠にこのまゝかと思はれる長さ！

何分の後か、次の大ゆれにやつと足がぬけました。幸に甚しい怪我でもなかつたので、暗黑の中を這ひまはつて、それと思はれる處に出た時、釜の下の火のみ赤々ともえてゐました。茶釜はまだそのまゝ沸騰してゐます。その側にたどりついた私は、上にかゝつてゐるその茶釜を、手で引くりかへしました。一つ二つ三つ四つ、不思議に熱くも何ともなかつたのです。然し灰神樂の爲、息が出來なくなりました。水道栓から水は少しも出ません。これが最期かと思つたものゝ、やはり耳に聞えて來る先生先生の叫聲の爲には、勇氣を奮ひ起さねばなりませんでした。丁度その時、又大きなゆれがあつて、棟と棟とのつゞいてゐるところの屋根に、あかりがさしたと思ふと、そこが兩方にパッと開きました。あゝ天の助、私は感謝に胸がはりさける樣でした。急いで傳つて、二階の屋根まで出た時、先

刻の二人のものが、窓際で足をうたれ腰をぬかしてゐました。何とでもして廣場に出る樣にと申つけて、次に二階の病人に聲をかけた處が、まるきり返事がありません。これでは仕方がないと斷念して、工場にまはると、主任や事務員やと一緒になることが出來ました。そこで色々相談し、手わけして、男女工三百餘人の安否を調べることにしました。工場の中央にゐた人、それは忽然の暗黑中に閉ぢこめられたものゝ大多數は、怪我もなく出て來ることが出來ましたが、逃げ出しかけた人は、皆出口のあたりで、下敷になつてゐますので、怪我の程度が判りません。その間も絶えぬ大地の震動に、立つてもゐられぬ有樣でありました。やう〳〵方々掘出して、無事の人を廣場に集め、怪我人を一方に收容し、死屍は又、やう〳〵取出した疊の上にねかし、點呼のうへ、十四五人不足のことを確めました。私は元氣の沮喪を恐れて皆に話をする爲に集つてもらひました。その時の私は、本當に世の滅亡の時が來たと思ひました。日本中否世界中がこの災難にかゝつたと思つたのでした。そこで、舊約全書にある神の怒のことを談り、ノアの洪

水の話をして、かうして死を免れた自分達の幸福を、感謝すると共に、今後生命がけで、使命を果す爲、すべての處理にあたらねばならぬこと、一碗の飯もわけて食ふ心持が大切なこと、すべて命令を遵奉すべきことを說きました。男工女工も、不斷から非常に從順であつた爲、この場合も、皆絕對服從を誓つてくれました。私は佛敎尊崇の工場主任の意志を尊重して、いつもは皆を集めて祈るといふ樣なことは、全然しなかつたのでありますが、この時は本當に一心不亂の祈を捧げました。主任も跪いて祈つてくれました。

それから後の一ヶ月、私は何を見何を聞き、そして又何をしたか、思ひ出しても胸がおのゝきます。然しこれを機會として、殘る半生を人の爲に獻げたいと云ふ考を一層深くしました。終生の事業として、今日の仕事に從事し、空拳を以て物質的に又精神的に、何ものかを作り出さうとした動機が、あの震災であつたと考へる時、天が一度私を葬つて、然して再びこの世に生あらしめたことが、徒でないことを感じます。あの頃の人心の緊張ぶりは、あの大慘事を天譴として受納

れようとした心持にも見られます。たゞ熱し易く冷め易い我々の仲間は、年毎にくりかへさるゝこの震災記念日によつて、當時の苦痛を反復して、大自然の威力に慴伏し、恩惠に感謝したいものであります。

人はともすれば、この世界を自分達の爲に作られたものと思ひ、他の動植物乃至礦物等を食客あつかひにし、又自分の我慾の對照としようとしますが、それは大なる誤謬でありませう。生物無生物を問はず、ありとあらゆるものゝ生存、若くは存在は、一の大なる意志の遂行である筈であります。我らはそれ〴〵の生活を肯定する必要があり、そして共存共榮の實を擧げてゆかねばなりません。然し假に、我々人類の立場から、この世界を見渡して見ると、我らは特別の恩寵を受けてゐることを自覺するのであります。

先荒野を見ると、一番最初に見えるものは、人の丈にも匹敵するごとき鐵道草（アメリカ草）であります。これは、繁殖力は强いが根は弱くて、すぐにも拔く

ことが出來ます。これを取ると次に相撲とり草(めひじは)が生えます。この事實は、私としては近年の發見でありますが、朝鮮生れの人達は、隨分經驗してゐると見え、鐵道草の生えた處はたゞでもいゝから引かせてくれ、といひます。かうしておけば、來年は屹度相撲とり草がはえる。それを集めて牛馬の餌料にすることが出來るから、その權利をほしいといはれて、周到な注意に感心したことでありました。この相撲とり草は、一尺四五寸のもので、根は前のより堅くなつてゐます。次にはえるものは、すべりひゆ(飢饉の時食料になる)とて、中々根のはつたもので、それを取ると次に青ごけが生え、濕氣を吸收する爲ほこりが立たず、人の庭として最適當の土地になります。この段階はどこでも同じであります。つまり人が努力すれば、その報として牛馬の餌料が與へられ人の食料が與へられ、然る後その土地が住宅地に適する樣になるわけであります。

田螺のゐる田には破傷風菌はゐない相であります。この菌は傷口に入れば腦を刺激して、往々致命傷になるものであります。孑孑のわく水は澄んでゐます。こ

れは水中の黴菌を孑孑が食べてしまふから、水が清められるといふことです。それで或地方では、孑孑のわいた天水を飲むさうであります。窒素の必要な田には蓮華草が生えます。硫黄のほしい處には螢が多く、そして螢合戰をして、その死骸が自然の肥料になります。若し夏の夜に蚊がゐなかつたらば、轉寢が流行して寢冷や盜難の數が、如何に多くなるかわかりますまい。芝は日あたりのいゝ處に繁殖します。これがないと風の吹いた時土手が崩れます。芝が堅くなると目ばりの樣になつて、鍬も通らなくなります。日蔭に植ゑれば枯れてしまひます。それはなくてもすむからであります。川岸の水の洩れ易い處には竹が根を張ります。それで岸は落ちません。動物でも植物でも、自然の命ずるまゝに、適當な場所に生ずるのであります。それ故に本來からいへば、植物にこやしをやる必要はないかも知れません。あまり密接させたり、時の相場を見て儲仕事を目論む人が、色々なものを作らうとするから、そこに無理が出來、不經濟にもなります。それから肥料としては、人糞以上のものはないさうであります。それですのに、今日研

究の結果だとかいつて、色々の肥料を作り高價で賣買し、一方人糞の始末に大童になつてゐるなどゝいふのは、不思議千萬な有樣であります。萬物は循環すると考へれば、捨てさるものはないわけでありますから、もつと〳〵研究して、すべてに適當の處置をとりたいものであります。

天物を暴殄することは罪惡であります。同時に、天然を破壞するのは一種の罪惡であります。その點からいふと、人の死後死骸をやくといふことさへも、再考を要することだと思ひます。道德的な意味を外にしても、自然に土に還らしめることが本當ではありますまいか。すべて我々は、いゝ加減に手を出して、永遠の仕事を破壞してゐることが、色々あるのではありますまいか。次に蟲などに、益蟲害蟲などゝ、我々の知つてゐる範圍で斷定することも、如何なものでせうか。大井の望遠鏡や探海燈などを造る工場の話に、完全に空氣を驅除した筈の眼鏡の中にも、一種の黴菌が出來て、ガラスを曇らせる、といふことであります。針金をかみきる蟲もあるさうです。今にコンクリートを破壞する蟲が出て來るか

も知れません。自然は、人のわからぬ思ひ到らぬ處にまでも、非常な努力を拂つてゐるのであります。我々はその偉大さに驚嘆すると共に、自然が我々に與へんとするものを、敬虔なる心を以て受くべきであります。動植物が、微妙な豫感によつて、我身を防禦し得る話は、あまりに多く知られてゐます。然し人にもこの機能がないことはありません。質朴の人にはことにこれが備つてゐます。漁夫は天候を豫告します。天文學者の樣に理論的の根據はないが、然し決して誤りません。一度難船しかけた人は殊に鋭敏であります。五官を通して研究し、測定し計算したものでなく、直接心に響くのであるから、誤がないのであります。雪國で凍死しかけた人は、降雪の前に一種の豫感があります。私も震災後、地震には鋭敏になつてゐて、少し前には屹度身體に感じます。これらは原始的のものだ、野蠻の遺風だといふ人があるならば、それは、あらゆる煩惱を解脫し得た人に、佛心がかゞやく、といふことの判らない人です。神を敬ひ天を懼るゝ人に、知識で歪められざる人に、特別多くの恩惠が與へらるゝのであります。

かう考へてくると、清い心を以て眞面目に正しく働いてゐて、それで餓死する筈はないと、私は敢て斷言したいと思ひます。「生命の爲に何を食ひ何を飲み、又身體の爲に何を着んと思ひ煩ふ勿れ」といふ語は、今も我々の前にかゞやいてゐます。土地に就いて考へて見ても、南洋に於ては、天惠の豐かさに、全然生活難を認められません。北に行く程働くのに努力が入ります。然し北海道などは、人が集つてから暖くなつたといふことですし、又短時間に花咲き實のり、すべての發育が早く、よその一年分を半年に營んでしまふ。さういふ點で、大に働甲斐があります。しかも寒さに鍛へられた人は、非常に意志の力が強くなります。本當に人間到る處青山あり、であります。海邊の漁夫にとつて最大切なものは、網と船との二つでありますが、然しそれをも持たない人があります。それでも絶望はしません。裸一貫で鮑を取るといふ職業もあります。又小川のほとりで水を堰いておき、一つの桶でかへぼしをして、その水の中から魚を掬つて、それで一家

の生計を立てゝゐる人もあります。或時、生活の窮乏を訴へて來た人があつて、校庭の掃除をさせてくれといふことでありました。「それには小使といふものがある。その仕事を渡したら、今度は小使が失職する。それより、目黒橋の兩側が非常にきたないから、掃除して來てくれ。役場の方の仕事だけれど、手がまはらない様だから。そして泥を運び掃除をして來たら、その報酬をあげよう」といつたら、そのまゝ歸つてしまひました。校庭の掃除といつたのも一時の策で、つまりは働くのはいや、たゞ貰ひたいと考へたのでありませう。淺草六區の邊には、それ〴〵の繩張があつて、その道で落してあるものを拾ふ。だから權利がついてゐるとのこと。それほどなら、掃除が屆いてよからうといつたらば、掃除は絶對にしないのだといはれて驚いたことでした。鵜の目鷹の眼で落した物を拾ふ前に、ずつと掃除をすれば、自然と拾物もある道理ではないでせうか。一度須田町の驛の前で、或小きれいなお神さんに泣つかれて、夫が今俄に怪我をしたので、工場まで迎に行つて國に連れて歸らねばならぬといはれ、大に同情の涙をこぼし、私

も一緒にゐた生徒も、遠足で殘つた食物やお小遣やをやつたところが、その女は毎日同じ事をいつて同じ處に立つてゐるのだと聞いて、馬鹿馬鹿しくなつたことがありました。歸りの旅費がないといつて、電車や汽車を仕事場にしてお貰して歩く商賣もあるといふことです。何も仕事がないといつて、無報酬でゝも仕事をしようと思ふ位ならば、餓死する事はない筈であります。現にルンペンの死は、いつも餓死ではなく喰過だといふことであります。生きる爲に仕方なしに働くといふ考では、努力は出來ません。働く爲に生きるといふ人の元氣潑溂さは、そこに必ず一つの仕事を求め得るでありませう。逆境に立つて奮鬪してゐるものには、特別の恩惠が與へられなければなりません。

大自然の恩惠を無視するといふ點から見て、女性として最恥しいことは、產兒制限と斷髮とであります。今日種々研究せられた產兒制限說が、同時に產兒保護であり、且母體保護であること、それから、それの社會政策上の價値といふこと

については、敬服してゐる次第でありますが、實際問題として、色々な方法のどれにも、確實性がないといふことが、結局天理に戻る所以と考へられるのであります。儼存してゐる自然淘汰といふものを無視して、一種の小策を弄することは、罪惡ではありますまいか。絕對方法としては、結婚若くはそれに類似の方法を執らないこと、制限法としては、或期間約束の上禁慾生活をすること、それを措いて、快樂の始末をつける爲の方便といふ樣な、御都合主義が、成功する筈はありません。そんなことは出來ないことだといふかも知れません。然し慾望の赴くに任せて抑制することが出來ないといふのは、禽獸の所爲であります。女性はその配偶者に對し、人としての品位の向上を要求すべきであります。私は三度の食事も、生命と生命とが相觸れるものだと思ひます。躍動する生命が人の體內に入つて、種々の動作をなし血となり肉となるものだと思ひます。食物を齒でかみ嚥下し、胃中の消化液で作用して、乳狀液となして、各部に吸收するといふと、食物は全くの受身にしか考へられない。然し全然機械的作用であるならば、食物が急

に生命の一部となるといふことはない筈であります。我々の常住坐臥、皆生命と生命との交渉であります。然も乳兒が母の胎内に宿りて、生れ落るに至る迄の過程は、生物幾萬年の進化と同じであります。母と子との共同作業は、實に神秘な且偉大なものであります。頭髪の一筋も、森林中の一本と同じ使命を、この宇宙に持つものであります。否躰軀卽宇宙であります。淺はかな人智で勝手に處理すべきものではありません。或は又、子供を與へられるのは嬉しいことであるが、食べさせられない、教育してやれない。それを育てるのは子供にすまない、といふ人もありませう。然し、我子可愛さには、親は倍も働く樣になるものです。それから、教育するといふのは、どの程度をいふのでありませうか。男の子は大學まで、女の子は專門學校まで、といふならば、少數の特權階級を除く外、大多數の家庭は、その爲に破產するかも知れません。そして又、今日さういふ家庭が相當にある。實に氣の毒なことであります。そんなにまでして、人らしい人が必ず作りあげられるかは、大きな疑問であります。かのジョージワシントンの母は、

我子を善良な子に育てあげたといふことであります。戰が起つて敗戰の報が傳つても、凱旋の榮譽を荷つたといふ話が聞えても、母は依然として、彼は善良な子である、とのみ云つたとのことです。善良！　それでいゝのです。それがすべてなのです。善良ならば親切でもあらうし、勤勉でもありませう。然して我子を善良にする爲には、敢て大學教育を要しません。專門學校に入れる必要はありません。最必要なのは、唯家庭の教育のみであります。學校教育は、衣食住と同じく、各の身分相當にすればいゝ筈でありませう。

次にこの頃甚しく流行してゐる斷髪について考へたいのであります。男女の區別は、受胎後三ヶ月位で判明する、といはれたものでありますが、今日では、二三週間も立てば、頭部の毛根の處でゝもその性を知ることが出來る、といふ話もきゝました。頭髪を檢微鏡上に置く時は、その組織を作る髓や、表皮組織が、特有の狀態を現はして、性の差が判然あらはれるとの事であります。さうして見れば、女性には鬚髯なく、髪の毛がのびるといふことは、習慣のみではない樣であ

ります。この最明瞭なる區別のもとに、女性は自らの髪容によつて、性格を表し趣味を明にし、且自らを裝飾するのであります。三毛猫はすべて雄であります。職分が違へば形も從つて違ふ。體操教師は、却つてお產が重いといひます。男性的活動は考へねばなりますまい。形も心も男並になることは、理由がなく又害があります。髪の毛によつて、人がらを判斷して見ますと、性質のやさしい人の毛は、長くすなほで、男の様にこはいのは、勝氣な辛抱のない人に多く、ちゞれてゐるのは、心持がひねくれ、猫毛の人は人のいふことをよく聞く様です。「僕は祖國を愛す」式は、權道であります。女は女らしく、母は母らしく、ありたいものであります。斷髪の母親が、子供とふざけながら歩いてゐると、若さは見えるかも知れませんが、奥ゆかしさは求められません。老いこむ事はいけませんが、母親としての重みは、必要であります。角かくしに綿帽子の高島田、貞操の危機には手裏劍に使用される玉の簪、龜の如くおとなしくあれといふ鼈甲、そのかはりとして現れたものは、馬の如くはねかへれと敎へる馬爪の櫛、これでは折つても

捨てゝも惜しくはありません。櫛を折つたら苦を捨てたのだなどゝ、氣休をいふほど、惜しがる事もないわけです。世の中はます〳〵分業になつて行くのに、女が男の様になるのは退歩であります。先天的に獨特の發達であるといふことを、十分覺悟してほしいものであります。（九月一日）

私は一生旅行する

私は徒歩で空手で、この世の中を旅行します。電車に乘らうとも、飛行機にたよらうとも、考へません。一日歩いてゐれは、山もあり川もあり町もあります。山に突當つた時、これを除けようとしてもだめ、身自らこれを越さねばなりません。飛行機に乘つてゐたとすれば、もし山の中に落ちたら、周圍のすべてが山の様な氣がして失望するでせう。川に落ちたら、途方に暮れて氣を失ふでせう。山もあるし川もある。そればかりつゞいてはゐないと考へるから、歩く氣にもなるのです。「重荷を負うて一生行く」といふことは、英傑にして初めて出來ることであつて、未來に何かあるだらう、こんなことばかりではあるまいと、先を樂みながら進んで行くから、その時々を過ごして行かれるのであります。「日暮れて道遠し」など丶寢言をいつてゐる暇に、道を見出して進んで行かねばなりません。他

の指導を受ける機會があれは、それも大切なことであります。それによつて前車の轍を踏まずにすみますから。とにかく考へるひまに進む事です。運命は進んで行くものに微笑みかけ、進んで行く處に自ら開かれてゆく。これが乏しき私の人生觀であります。「獨創がいゝのだ」と力まないで、解らぬことは人に聞けば、親切に教へてくれます。經驗ある人に從順であることが、安心して進んでゆく大事な秘訣であります。「そんなことはするものではない。昔の人はそんな事はしなかつた、ヤレ〳〵勿體ない」老人はいつも〳〵かう云つて、私共を戒めました。世の中は何と氣むづかしいものだと、その時は思つたのですけれど、然しそれが習慣になります。事互に窮屈を感じてゐたそれが、今役に立つてゐます。「叱り手のない人は不幸だ。指導者を持たぬ人は氣の毒だ。指導者の必要を認めないと考へる人は更に氣の毒だ」と私は眞から考へます。私が子供の時、小學校で地球は丸いものと教へられて、歸つて話をしたら、祖父が非常に怒りました。祖父として見れば、地球は平坦な筈であつたのです。そしてその人は、一生自分の信念をも

とゝして暮し、安らかに生を終へました。私が信仰を得た時、最初に思ひ出したのはこのことでありました。理屈があらうがなからうが、自分が信じたらそれは絶對であります。信仰は科學を超越してゐます。科學にしても、自分が研究しなければ解らない、といつたら仕方がない。やはり人の研究したことを眞と信ずる外はありますまい。我々が蟻の歩いてゐるのを見てゐれば、その行先も何も一目で解りますけれど、蟻自身には解つてゐますまい。然も如何にも勇敢に進んでゆくではありませんか。もし、その行手に水たまりがあつたなら、私は恐らく一枚の木の葉でも落してやる心持になりませう。この蟻と人との關係は、又人と自然との關係であります。我々には行先は少しも見えません。たゞ偉大なる自然の力を信じ、大丈夫だと思つて、誠實に勇敢に進んで行くのであります。

思へば巧妙に作られた人の身體よ。寫眞機以上の精緻な眼の機械、電信よりも早くそして微妙に末梢より中樞に傳へらるゝ神經の作用。セメント會社のモーターで石を碎くにも似た齒の作用、胃の腑の働。足許に蚤が止つても、全身の活動

を促す反射運動。心臟のポンプ作用等々。化學的物理的全部の機能は、この人體に集められてゐます。大自然に不能の文字はない筈であります。それ故に私は奇蹟を信じます。新田義貞の祈によつて、稻村ヶ崎の海は干たのでした。モーゼとモーゼの率ゐてゐた七千人の祈によつて、紅海は開けたのでありました。大自然がその特權によつて、兩手で道を開くといふことは、何でもないことでありませう。元寇十萬の兵は神風によつて鏖しにされました。日蓮が龍の口で首の座になほつた時刀が折れたといふのは、あたり前のことであります、半信半疑で生きて行くのは、無智よりも惡い。堅固な信仰に反應がなければ、世の中は暗であります。

省線電車の乘車賃が、改正せられない前でありましたが、田町から目黒迄の切符をかふのに二十錢出しました。こまかいのはないかといはれたので、すまないけれどゝあやまつたら、混雜の最中ではあつたが、出札係がつり錢をなげてよこしました。その内の一錢銅貨が、道の方にころがつた時、私は涙が出ました。そ

れを拾ひに行つて思はずと見れば、そこには五十錢銀貨が落ちてゐて、一錢は丁度その上に乘つてゐたのでした。田町交番に屆けたら、よほど立つた後通知があつて、私はその五十錢を拾得することになりました。當時の私にとつて、五十錢は尊いものでありました。これは一つの物質問題にすぎませんけれども、私の今までの生活は、丁度それの連續であります。私は決して失望しません。正しいあゆみには後悔がありません。逃げ隱れる曖昧の生活には、反つて苦勞が伴ひませう。私は天の命ずるがまゝに、いつまでもこの歩をつゞけます。人のなすべき道の羅針盤として、宗教を信じます。宗教家でも、幸福を求めてゐる人は、献身的と思はれる仕事に後悔をしてゐます。知識の開けぬ時代には病人が少く、病氣の種類も數へる位で、しかも木根草皮が萬病をなほしたのであります。拾ひ食しても平氣の間は、苦勞がないが、細胞が完備し、恐ろしさがわかる年頃になると、神經質になつて病氣がとりつき、チブスなどにもかゝるのであります。半信半疑の生活は一番惡い。徹底してゐれば、それこそ岩をも徹し得るもの、と私は信じ

ます。天をもとゝし天に順應して行動すれば、人と人との間にも一脈相通ずるものがあります。何々療法といつて、肉體と精神とを療治するものが、隨分今日ある樣ですけれども、若し誠實親切の心からすることならば、自然に癒ゆべきものに、人の手を人の誠心を添へるわけですから、これは全快するのがあたりまへでありませう。地球の運行も、器械的にまはると思ふが、然しどうしてその運行が正確なのか。これほど不思議の事實はありません。一粒の米が地に落ちて實を結ぶ。これも不思議であります。この世の中のありとあらゆるものは、すべて生きてゐます。この大きな不思議を、我々は見のがしてはいけません。空氣にも生命があります。食物にも生命があります。空氣と我と合致し、食物と我と合致するから、はじめて我の成長があるのであります。根から葉が出來、葉が落ちて根を殖し、その結果幹がふとります。これは木が生きてゐるからであります。然し單に木自身の力といふべきものでせうか。人が眞理を見出す。けれどその心の働は、自分で作りあげたものではありません。時計の樣な複雜な機械でも、狂つた

時は時計屋がなほします。これは、自分が作りあげることが出來るから、なほすことも出來るのであります。子供がもし親の製作品であるならば、病氣の時に病源がわかる筈です。人は自然界を征服するといふ。然し自分で作りあげたものでない以上、人の力で自然がわかるわけはありません。この不思議の世界が、一歩一歩わかつて行くといふ事は、努力に對して、天の與へ給ふところであります。これが宇宙の意志であり、神の榮光をあらはすとは、この謂でありませう。

これが私の人生觀であり、道德觀宗教觀であります。人はこれを以て、安價な世渡りとか、自己欺瞞とかいふかも知れません。然し私は、かく信ずるが故にかくいひます。今日の樣に、誤れる英雄主義で、何か新機軸を出さねば、といふまけ惜みは、もうこり〳〵です。凡人は平凡な考のもとに、人生を送ります。然し凡人は、世の大多數を占めるものではありませんでせうか。（九月二日）

いづれが親心

私は震災前約一年大正十一年の秋に、青山女學院の教職を擲つて、保土ヶ谷絹撚會社の女工取締となりました。學院の生活ぶりにあきたらなかつたのではなく、順境の人を教育する人は他に幾人もある。逆境の人にこの燃る如き心のすべてを献げて見たいとの念願であつたのであります。奉職後の私は、社員の人々から、そして男女工のすべてから、冷やかな眼をもつて對されてゐることを意識してゐました。然も私は隨分隅から隅まで、注意し監視し指摘しました。男女工の不行儀は嚴重に誡めました。個人の會社に對する精神を正すことに努ました。しかし病人のある時は、自身脈をとり熱を計り、自身藥を飲ませ食物を調へその苦痛をいたはりました。當時病人の食物は粥に梅干三個と極つてゐました。あまり大事にすると、いつ迄も寢てゐたがるからとのことでありました。然し私は、私

財をもつて鷄卵をかひ牛乳を求め、榮養に努めさせました。病人はずん〳〵恢復し、横着な振舞は見えませんでした。虱をとつてやること、たゞれ眼を洗つてやることは、殆毎日の仕事でした。數ヶ月の後、彼等は私を神の如く敬ふ樣になりました。相當資格ある教育者が、身を下して女工の連に伍し、共に食ひ共に寢ね、一人々々に同情ある凝視を怠らないといふことは、彼等教育程度の低さものには、一大驚異であり、そして又非常な歡喜でもあつた樣です。當然の歸結として、そこに絶對服從が行はれました。女工は勿論、男工迄も緊張し、後暗いことを恥る樣になりました。私はその時始めて母としての特權を得たと思ひました。

飜て彼等女工達の親を見れば、大多數が實に言語道斷の態度をもつて子供を遇してゐました。十一二歳から十四五歳の人は、一時金二百圓乃至三百圓。勤務中の日給は、一日二十錢乃至三十錢。食費は幾分の補助以外約四圓自辨しなければなりません。工場諸雜費をさしひけば、彼等の手に殘るものは、一枚の衣服の料がやつとでした。それさへ親はねだるのです。或人は醉顏朦朧として來り。無錢

遊興の後仕末をさせようとします。私は事毎に憤慨しました。それが親としての態度か。何といふ淺ましいことだらう。よし自分は、この二百餘名の女工の親として、この身を捧げよう。私は入社當時以上の固い決心の前に微笑しました。否感歎さへもしてゐました。

然るに幾何ならずして自身の無力が暴露されました。親としての彼等の崇高さが發揮されました。震災當日、山を越え川を渡り、仕事着の儘の親が、陸續として集りました。無事であつたと聞いては、喜んで腰を拔かします。次の瞬間には多くの中から我子を探し求め、抱きついてゐます。一錢の小遣も剝ぎとらうとした親と、その子とは、相擁して泣いてゐます。天秤棒をかついだまゝ、鍬をさげたまゝ、烏啼が惡かつたとか、ひどく氣になつたからとかいつて、急いで來た人の娘達は怪我をしてゐました。死んでゐました。私はこの靈感の前に跪かずには居られませんでした。

金子そよといふ子供の兩親は、野らで仕事してゐたまゝ飛んで來ました。家の

方は心配がない。この子が氣になる。この間から病氣してゐたといふから、どんなことかといはれた時、本當に胸がふさがりました。「誠に申譯がない。お粥を食べさせようとして、お鍋を持つてゐた位であつた。決して忘れたのではないが、火を消す方を先にして、それから來て見たら、一聲もしない、この邊に寢てゐた筈だが」と、私は二階の階段の邊をさし、「このあたりに敷かれてゐる樣だから、掘り出すことにする」といつたら、「ィヽエあすこで呼んでゐる。先生といつてゐるではありませんか」と別の個所を指すので、氣休の爲と掘つてもらつたら、本當にそこの下敷になつてゐました。窒息狀態で、怪我はしてゐませんでした。活を入れ水を飲ませたら、やう〳〵息をふきかへして、一聲本當に、先生！と叫んだ時、きいてゐる私はゾッとしました。嗚呼、親はその愛の力によつて、聲なきの聲を聞くのです。何といふ尊さでせう、青山の敎職をすて、俸給は望まず、奉仕の出來る係累なき身を、憐なるものに献げ、親になつたつもりで今日まではゐました。女工の氣持を察することは、百發百中。自分のすることは立派な愛のあ

らはれであると考へ、矜持を持つてゐたその心が、この震災によつて、一度にこはされてしまひました。その意味に於ても私は生れかはつたのでした。

大井タッといふ子は慘死してゐました。これは年限があいて、まだ仕事をしてゐたのでした。暇をくれと親から申出してゐたのを、なれてゐるもの故、そのまゝに一日のばしにのばしてあつたので、一層氣の毒でした。親の來た時はまだ所在が判らなかつたのです。その時親は非常に立腹しました。「この廣い敷地の中ではないか。何とでもして助けてくれられさうなものだ。自分だけ助つて娘を殺すとは何のことだ。神樣の樣だと皆から尊敬されてゐながら、それだけのことが出來ないでどうする」父親は兩眼に一杯の涙をためたまゝ、拳骨を振あげて私の頰を打つて打つて打する爲ました。私はたゞ頭を垂れ恥入るばかりでした。二日目にやう〳〵掘り出したら、舌が長く出て頭はつぶれ、蛆虫が方々にわいてゐました。それを親は抱上げて頰ずりしてゐます。何といふうるはしい姿でせう。省みて自分自身のしたことを考へると、實に慙汗背をうるほす次第であります。

ちゑちやんといふのは、來て間のない子、虱をわかして中々世話がやけたのでした。歸してくれといふことでその日にときめてあつたのが慘死したのでした。眼もあてられぬ姿の我子を母親は抱あげて頰ずりしながら、「なぜこんな處によこしたらう。可愛想なことをした。親の勝手から、こんな處によこして苦しい目をさせた。働かせてすまなかつた。よこさなければよかつた」といひつゞけてゐました。三日目に火葬する迄、毎日幾度か來て、鼻持のならぬほど臭い、そして蛆虫がわいてゐるその腐肉を抱いて泣いてゐました。家には六人の子供がある想ですが、死なせた子には特別の愛着を覺えることゝ、實に氣の毒に思ひました。

建物の一部に腰を挾まれてゐた三森ふくえといふのは、顏色はあまり變つてゐませんでした。どうか出して下さいといふのですけれど、どうするわけにもゆかず、物干に使つてゐた棒で、煉瓦をおこし、少しづゝ隙間を作り、引出してやらうとしてゐた處が、又大ゆれのした拍子に、私のつつばつてゐた手がはづれ、上から煉瓦がころがりおちた爲、その子は一たまりもなくすつかりつぶれてしまひ

ました。その刹那の顏は今も目についてゐます。後で見たら、髮の毛が芝生の上に飛んでゐました。私は無意識に、自分自身をかばつたものと思はれます。最後の一瞬間に、自分が生きんが爲に、人を捨てたものと思はれ、いつまでも〳〵氣になつて忘れられません。

當時、まだ十分な設備が出來てゐなかつた爲、時の合圖のサイレンは、上まであがつて行つて紐を引くことになつてゐました。その時丸山正雄といふ青年は、恰度正午のサイレンを鳴す爲、階段を登つてゐた處でした。煉瓦の崩れた時、なげ出されたのであつたが、探し出した時はまだ息がありました。助けてくれ水をほしいと、そればかり云つてゐます。やう〳〵かつぎあげ、安全の地に横たへた時、又歎願してゐる。「先生はいつも藥をくれたではないか。この怪我をなほして下さい。せめて一杯の水でも」といつてゐる。その時にもう夕方になつてゐました。脈を見てゐる私の右の手を握つて、水を水をといふので、もう仕方がなからうと、杓から水を飲ませました。口移しにしてやるだけの心持が、なぜ出なかつ

たかと、今では本當にすまなく思ひますが、その時には考もつきませんでした。

先生といひながらそのまゝ息を引とつた時、握られた手の冷たさ恐ろしさ、どうかしてこれを離さなければとばかり苦心して、やつと一つ〳〵指を開いてほつとした私の姿は、やはり母の愛を持たない醜いものでありました。

工場の入口の社宅にゐた、コックの齋藤といふ人の妻は、不斷夫婦喧嘩したり子供を叱つて頭をなぐつたりしてゐたが、丁度産褥にあつて、そのまゝトタン屋根に敷かれてしまつてゐました。乳子を懷にしてゐた母は、その子を保護する爲肩で兩腕で天井をさゝへてゐました。掘り出した時、子供は元氣でした。その子を引だして抱上げた拍子に、屋根はトンと音して上からつぶれてしまひました。母は死しても猶その双手で子供を保護してゐたのでありました。

七日の朝、横濱に行く用事があつて、炎天を歩いて行きました。正金銀行の地下室には、死人が一杯だといふ事でしたが、血と油とが四邊に充ち滿ちてゐました。丁度出入口に近い處に、子供を抱いたまゝの死骸を見、悲しさと忝さとに

胸が一杯になつてゐた時、取かたづけの人夫の話に、「こんなのは何でもない。中央に子を懷いた女が、乳首をかみきつてゐた。恐らく子が熱い〳〵といふので、自分の血でゝもぬらしてやつてゐたのだらう。これだけの中に、父親が子を懷いたのは一人もない」といつてゐました。又「男の死んだ姿勢は樣々だが、女は皆うつむき加減になつてゐる。何かな庇つてゐたのだらう」とも云つてゐました。

自分達がどんなに盡しても、親にはなれない。然も父親以上に母親は献身的なものだと、その崇高さに自分は本當に、謙虛の心持になれました。

嘗て、青山女學院が、代官山に新校舍建築の時、地鎭祭の前日、工夫が一つの骨を掘り出したので大騒となり、檢死も隨分やかましかつたのでした。乞食が穴居してゐて死んだもので、十年程經つてゐたとのことでした。一人の死もこれだけ保護されるのが本當ですのに、震災當時は、無緣の佛となつたものが、どれだけかわかりません。やはりその時、長友といふ工場醫の處に、重傷者を十五六人ばかり入院させた爲、毎日食事や何かと用事に行通ひ、富士紡績の横を歩きまし

たが、毛髪だけ動いてゐるものがあるし、血が散つて姿のまるきり見えぬものがあるし、二日程の間は、助けてくれといふ聲がきりなしにしてゐました。荷車につんで運んでゐる死體は、丁度魚市場に鮪を持つてゆく樣につみ重ねられてゐました。あのすべてには母があるでせうと思ふと、母親の爲にでも、二度とこんな悲慘事のない樣にと願はないでゐられませんでした。

平氣で死人をいぢる樣になり、朝から晩まで炊出しの指圖しながら、濁つた井戸水を遣ひ、物干にあつた洗濯物の中、綺麗なものを笊に入れて幾層にもして水を漉し、それで御飯を炊き、血を洗つた盥で食料品を洗ひ、死屍を乘せておいた戸板を、俄雨の屋根にしたり、或は朝鮮人さわぎの爲男手のなかつたところで死屍を火葬したり、事務的にすべてを處理して、割合に泰然たる態度と見え乍ら、實は下腹の力がぬけてしまつてゐた私。恐ろしいといふことを、その時以後本當に覺えた私は、それを自負心のなくなつた結果だと考へてゐます。私は母親には

なれません。母親に代つて教育するなどゝいふ言葉は、口から出し得ません。本當に私の仕事は、母親の手助としてのみ、役に立つたのであります。（始業式を明日に控へた九月二日）

愛の極致

私はあまりに悲慘な親の愛を見ました。その親の愛は、私には及びもつかぬ強さ深さをもつものでした。私は實に恐ろしくなりました。姙娠中の蛇は齒に毒を持ちます。未熟の梅は靑酸によつて、種子の害されることを保護します。親のみがこの微妙な力を與へられてゐるといふことが、私には恐ろしい事實でありました。それは盲目的でだめだと人はいふかも知れません。本能で尊いものではないと云ふかも知れません。然し、本能だから自然なので、自然だから深さ强さを持つてゐるのでせう。附燒刄でそこまでは決して行けないのであります。子を思ふ道に惑ふのは、昔も今も同じ人情でありませう。あれはあれこれはこれと、はつきり判つてゐながら、然も盲目的になる處に、眞の親の愛が認められます。人の理智の目があいた爲、世の中が幸福になつたでせうか。事實この頃の母親は聰明

だと誇つてゐます。盲目的の愛などは持たないと自慢してゐます。その母親は如何なる態度で子供に接するでせうか。親甲斐もなく子供と喧嘩する。子供を批評的に見る。道を歩けば自分の方が若く見られたい。美しいと評せられたい。そして幾年かの後、子は精神的にも親を離れてしまひます。親は批評される位置に立つことになります。喧嘩するには友があります。批評するには師があります。そのいづれにも得られない或ものを、母親が持つてゐるから、子供が安心してゐるのではないでせうか。初生兒の絕對信賴、親の腕を天國として、やすらかに眠つてゐる事實を見た時、これが實に愛の極致だと思はれます。今の調子でゆくと、斯身飢斯兒不育斯兒不捨斯身飢といふ場合、さつさと捨子をしてゞもしまひさうです。集合離散これこととする夫婦關係は、子供までを厄介視することになります。私は利口な母親を欲しません。安心してあまえられる母親をほしいと思ひます。僞多き世に、これこそは眞實と信じてゐるそのものが、根柢から破れる樣では、人の子はどこに安住の地を見出し得るでせうか。

夫婦關係もさうであります。もとは他人だなどゝいふ處まで、冷やかになつてしまつたら、本當に手のつけられるものではありません。あばたもゑくぼ。互が互を自分自身と考へる時、すべてを許すことが出來る筈です。天地の運行が永遠に正しい道をくりかへして、些の迷もないとするならば、我々人間世界もこの宇宙の所産である以上、所謂緣あつて結ばれたもの、多くの人の中から、我半身として選ばれたものに、特殊の情愛を感ずるのは、自然のことでありませう。その自然がお互の所謂聰明さの爲歪められるといふ事實は、實に人生悲慘事の最大のものであります。勿論配偶者選擇といふ風のことは、銘々が周密に考ふべきことで、これは又他に云ふべき時があらうと思ひますが、少くとも自分が結婚意思を表明した以上、そこに重大責任が生ずるのは當然でありませう。一つの船に乘つて長い航海をする場合は、所謂吳越も同舟であります。まして況や偕老同穴を契り、他から祝福され、喜のもとに結ばれたものが、離れるといふ筈はないのであ

ります。離れられないものだといふ立場から物を考へるのと、愛がなければ離れるといふ標準から考へることゝはその差千里とも云ふべきであります。「神の合はせ給へるものは人これを離すべからず」我々には運命を左右する力は與へられてゐません。愛の高潮がそのまゝの形で繼續するなどゝいふことは、誰にだつてあり得ないことは自明の理であります。すきにもなる、きらひにもなる。きらひになると今更の樣に、對手の缺點が、それこそ他人の知らぬ樣な缺點がはつきり眼だつて來て、ゐても立つてもたまらぬ樣になるものです。すきになるとあばたもゑくぼです。潮のさしひきが、永遠變らぬ以上、人間の愛情の高低も、あるのが當り前。それからお互が、異性固有の短所を今更らしく眺めて、悲歎して見ても仕方がありません。自分自身に短所を持つてゐるから、結婚によつて互に勸め互に勵まし、一人々々その短所を反省してゆく爲に、一生の伴侶の必要があり、それによつて、一人前の人間としての仕事が、はじめて出來得るのであります。この根本の覺悟さへ搖がないならば、時には喧嘩といふものも、退屈まぎらしにい

ゝことでせう。そして飜つて考へて見ると、お互に非常な愛着の絆をもつて結ばれてゐることが、今更のやうに判明するものであります。

次に私は、この心理を師弟關係に應用したいと思ひます。「七尺下つて師の影を踏まず」は、もう古いと人はいふでせう。然しそれが果して間違でせうか。君父師と數へたことが誤つてゐて、新しい根據のもとに、新しい眞理が發見されたのでせうか。西洋の師は奴隷の變形だと云ふ人があります。然しそれは西洋の話。東洋に於ては、斷じてさうではありません。又さうであつてはならないのであります。知識を得る爲には機械もいゝでせう。早い話が今日でも、映畫とか蓄音機とかゞ使用されてゐることは確であります。然し心と心とふれあはなければ、人は作りあげられません。人を作り得ぬ教育は、價値のないものであります。たとへば特殊の學校にしても、その職業意識の奥に動く人間味がなかつたら、本當の仕事は出來ないでせう。して見れば、國民教育とか中等教育とかのみでなく、高

等教育も大學教育も職業教育も、人と人と相俟つて、はじめて出來上る筈であり、それがなくては、眞の教育とはいへません。處で既に人と人との關係であるならば、互の愛が基調になるのは、判りきつた事であります。今でも、純な子供にはこの氣持が多分にあります。教育者自身が、この神聖なる務を遊戯視し、若くは生徒に對する指導を誤ると、遂にその人の一生を失ふ樣の結果になります。私はこの頃時々起るさういふ事實を、單に師が惡いとのみ、云つてしまふものではありませんが、用意が足りないから、さういふ過が起るといひたいのです。つまり原則として、師は人格者たらんとする希望に燃え、又一歩先にその目的に向つて進んでゐるもの、生徒はそのあとを慕つて、これに指導を受けてゐるものでなければならないと信じます。これは一人一人の場合も、多數の場合も、同じ筈であります。誰でも考へて見れば、初めて教壇に立つて、先生と呼ばれた時の感激が胸に甦つた時は、我知らず敬虔の念に打たれるでせう。出産した時の母親の如く生徒の可愛さが油然として起つて來る筈であります。そこに結ばれた緣によつ

て、もう他人ではなくなつたのであります。袖ふりあふも他生の縁。その自然の愛によつて結ばれるのが、本當の師弟關係だと考へる時、嚴密な意味に於て、現在どれだけ、この中に數へ得るものがありませうか。實に寂寥々々の感に堪へません。（九月六日）

子を持つて知る子の恩

それは子を持つて知る親の恩の間違だと人はいふかも知れません。然しその言葉はあまりにも人々に體驗されてゐます。私は今別な立場から、子の恩を說かうと思ふのであります。或子なしの方がいはれるのに、「自分達が少しでも金の出來たのは當然だ。子供の爲の費用をかけてゐないから。そのかはりに社會事業に盡さうと思ふ爲、貯蓄の必要も起つて來る。さうした場合、もし社會奉仕が出來ないといへば、それは享樂に耽つた結果と見られて仕方がない。不幸な自分達は、せめて時間とか金錢とかの餘裕を、社會の爲に獻ぐべきである」と。これは實に至言であります。銀も黃金も玉も何せんにまされる寶子にしかめやもと、千年の昔憶良は看破しました。羅馬の賢夫人は、他の人達の多くの財寶を比べあふ中に、我子をつれてゆき、我にこの寶ありと豪語したとのことであります。子のないの

は大きな不幸であります。子は家庭の天使であり、天使を持たざる家庭は、精神的に墮落し易いのであります。「子を生むことによつて救を得べし」といふ言葉もあります。身體も母親には抵抗力があります。多く食べてもすべてが消化する。睡眠時は少いけれど、この短時間の中に、深いねむりに落ちるのであります。精神的にも同じ結果を生ずる筈でありませう。「女は弱しされど母は強し」といふ言葉には常に幾多の證據を擧げることが出來ます。子を持つたことのないものは、教育上それだけ缺陷がある筈です。すべての人は、次代の人の教育者を以て自任すべきでありますが、母親としては苦勞しないで出來ることも、外の人には苦勞してゐながら出來ないことが、本當にあるのです。子持はねばり強く眞劍味を持つてゐます。鷄が雛を抱いてゐる時は、嘴が非常に強くなります。これはすべて子の恩ではありませんか。

昔は子供が不始末をすると、親がその子を勘當しました。可愛い子をも捨てねばならなかつたのです。場合によつては、それでも申譯がないと云つて、自害ま

でしたものでありました。勘當したとて責任がなくなるものでもないし、死んだとて必ず子供が反省するものでもありません。然しこれは體面の爲申譯を立てる爲であつたのです。それを馬鹿々々しいと考へてゐる現代人は、それは親の知つたことではないと、嘯く傾向を持つてゐます。然し實際の處、子は親の雛形で、そして又親の鏡であります。親のしたことがチャンと子に移つてゐます。いつか見た曾我廼家劇の、和尚さんといふのに「情死しかけた人が、永年離れ〳〵になつてゐて、とにかくめでたく解決しようといふ時、年頃の娘が又情死しかけた」といふのがありました。いつも乍ら一堺漁人が心理を洞察するのに、感心したことでありましたが、マザ〳〵と自分の過去をそこに見せられた時、驚きあわてゝも仕方がありません。形は變るかも知れません。しかし子は親の道を踏むものです。子供を家に閉ぢこめて、夫婦で外出すると、子供は勝手なことをし、段々親に内證をすることを覺えます。大變だと思つた時、もう手にあはないのです。親が子に教育されることが如何に多いか。親といふ自覺によつて人としての自覺が

現れます。子の爲にも自己を慎まねばならなくなります。故に親は子の爲に人格を完成することになります。

獨身婦人は、三十前後になると、性慾が出るかはりに、母性愛が芽生えます。どこの子を見ても、可愛くて〳〵たまらなくなります。然しそこに何となしの寂寞を感ずるのであります。我を忘れて手一杯に大きな仕事をしてゐれば、そんなことは考へる餘地がありませんけれど、普通の人はさうはゆきません。その時期が過ぎると、頭の明敏さが、理性ですべてを判斷しようとすることになります。神經過敏で、叱り方にも非常なするどさが伴ひます。人の長短がはつきり判ることは、或意味に於て不幸であり、無條件で盲目になり得ることは、幸福であります。馬鹿で間のぬけた處に、尊さがあります。理屈ぬきの親馬鹿は、子を持つてはじめて到り得る境地であります。矛盾があつて、そこに人情がわかります。人を許すといふことは幸福であるが、親心で初めてそれをよくするのであります。栗のいがは、どの方面にも突かるゝ性質を持つてゐますが、成熟すると自然と口

が開きます。これを栗が笑ふといひます。主義者が母性愛にめざめて轉向した、といふ挿話は、かくして出來るのであります。今日多數の獨身婦人が、立派な教育者として世に立つてをられるが、何卒この點に留意してほしいと思ひます。今一度いひます。馬鹿で間のぬけた處に尊さがあります。

宗教の問題は、ひたすらに上を見て、縱に貫いてゆきます。子を持つてその宗教は、深い處に根を下します。植物が枝を出し葉を出す如く、舅姑兄弟親戚と、横に愛をひろげてゆきます。自分自身の自由にならぬ愛と力とがわくといふことが一つの宗教であります。神にすがるか子に結びつくか、そこまで子供の爲に夢中になれば、宗教と一致します。貧乏しながらも、多くの子供を育てゝ行く。そこに云ひ知れぬ尊さがあります。子が懷かないのは親の罪であります。子を外に飛出させるのは、親の罪であります。母はあらゆる意味に於て、眞の母でなければなりません。さう考へると、母が職業を持つことは、子供にとつてあまりいゝことではないと思はれます。

次代の責任者として、その個性を認め、これを尊重することは、父母として必要のことであります。然し畢竟子供は子供であります。年相當に育てることが、おとならしいおとなになる方法であります。子供には子供の世界があること、現在に對して夢の世界があることを親として十分認めてほしいものであります。（九月七日）

それもさうだが

私は常に漫畫家に教育されてゐる故を以て、この機に際し、その方達に敬意を表するものであります。最近面白く感じたのは、或新聞の人生勉强中の一節であります。ワシントンは父親の愛する木を切つたが、正直に詫びた。實にえらい。と先生が教へる。子供は早速實行した。ババえらいでせう。……父親は自分の大切にしてゐた植木の前に、尻餅をついてゐます。子供は話を熱心にきゝますが、然しすべてを聞く力はないのです。その中の或點に注意が集ると、木を切つた—えらい。となつてあらはれるのです。それは尋常一年の子供だからではなく、大體子供といふものが、さうしたものなのです。單純極まる自分の心持から、或斷定を下します。それは時に事實の一部分のことがあり、時に事實をあやまることがあります。然し、子供自身は、それを眞と考へたのであるから、非常な熱心を

以てその說を固守します。私は子供の個性尊重といふことを、十分考へるものでありますが、それは子供を子供として、純眞さを有するものとして、尊重することであつて、成人並にあつかへといふ事ではありません。私が子供といふのは、心身共に整ふ迄のものをいふので、年齡でいへば二十五歲まで位をさすのであります。

昔の親はどなりました。その時子供はハッと思ひます。その拍子に、今迄信じてゐたことの根柢がぐらつく。このハッと思ふことは子供にとつて非常な大事なことであります。或場合には、それが終生忘れ得ぬ印象となるのであります。冷靜に諄々と說いて聞かされる話は、あまりに子供の心を刺激しません。場合によれば、親が涙を以て誡めても、子供はその涙の出るところ流れる處を、感心して眺めてゐます。その時親は、この子は橫着者だときめてしまひます。かくして親と子との心持は一歩々々遠ざかつてゆきます。

九州の或所に、親一人子一人の家庭がありました。母の顏が特別醜いのに、そ

の娘は非常に綺麗でした。この子は學校でも師友に可愛がられ、性質がやさしく又成績もよかつたのです。母は自分が貧乏しながら、この子の爲には、金錢を惜まず、又身なりをも相當に整へてやつてゐました。母は子を愛し子の母に盡し、非常にうるはしい家庭であつたが、高等女學校二年位になつてから、ふと娘が憂鬱になりました。そして或時、東京に出て苦學すると書置して、さりげなく外出しようとするのを、かねてから注意してゐた母は、すぐに氣づいて膝下によび、どこにゆくかと聞いたら、母親に樂をさせてあげたいから、これから東京に出て働くといふ。母親がいふには、お前は女學校に這入つたはじめは、急いで歸つてはお母さんと呼んだ。二年頃から段々氣が變つた樣だ。母を慕はないばかりでなく、汗水流して働いてゐるのに對しても冷淡になつた。お前はお母さんの顏の醜さを厭ふ樣になつたのだらう。私としては、樂をさせてなどもらはなくてもいゝから、このまゝ側に居てもらひたいのだ。もしどうしても上京したいなら、卒業後にしてほしい。なぜ今でなければならぬのかと、根ほり葉ほり聞いて見たらば

到頭白狀しました。あなたのお母さんは、恐ろしい顔をしてゐるから、遊に行くのはいやだと、親しいお友達にいはれてから、はじめて家がいやになつてしまつた。申譯ないが、お母さんが嫌になつてしまつた。どうか私を一人にしてほしいと歎願された時、母は今までいふ機會もなく、いひたくも思はなかつた過去を談ることにしました。娘が二つでやう〳〵歩き出した時、手毬をついてゐたら、圍爐裡にころがつた。子供は無心にとりにゆきかけた。ハッと思つた母が、子供を引もどした時、沸騰してゐた鐵瓶の湯を、顔に浴びてしまつたのであつた。そして子供には疵がつかずそのまゝの容顏に育つて行つた。この話をはじめて聞かされた娘の心は、どんなであつたでせう。今迄一番いやであつた母親の姿が、一番尊いものとなり、親の恩をはじめてしみ〴〵味つた娘は、女學校を卒業してから小學校の教師として、今も母一人子一人の樂しい生活をくりかへしてゐるとのことであります。大きい愛を、普通の場合には發表しようとしない。そして必要の場合にはじめて談られる時、子供は吃驚する。感激する。今までの心持が急に變

つて來る。我子を生み育てた親は、非常に力强いものを持つてゐます。親にとつても子にとつても、それは仕合なことであります。然るに今の母は、すべてを隱して置くことが出來ません。事毎に相談相手にしようとします。これは個人としての人格尊重だといひますけれど、實は恩に着せる傾があるのであります。子供に驚く時がなく、感激する機會がありません。自分で生んで自分で苦勞したとて知つたことではない。親は產んだ以上、これを養ひ敎へるのは、あたり前のことだと惡態をつきます。

青年は人生の危機であるといひますが、もとは操行上の問題が心配の種であつたのに今は思想上の問題が殖えました。時には二者兼備へる人も出來て來ます。情的關係の結果が、思想の動搖のもとゝなることもあります。昔に比べて親の心配は二倍になつたわけであります。理論的にいへば、それを豫防し得ないのは、親の罪だといふことになりますが、然し、親の愛が徹底しない場合、親が無力な場合、ばかりでなく、本當に、順當に愛の手で育くまれ、正しい家庭に育つてゐ

ても、一種の熱病として、一時的に、さういふ病氣に傳染するものもあります。それを親は如何にあつかふべきか。これが刻下の重大問題であります。私の娘は非常に頭がいゝ、だから赤くなつたのだ。といふ人があります。然し頭のいゝといふのは、子供として明敏だといふので、おとな並にすべて思慮をめぐらす、といふことではないのです。その點、親はかひかぶらぬだけの、周到なる用意をしてほしいと思ひます。一口に赤といつても、子供のと成人のとは、成立の道程がちがひ、純眞さもちがふ樣です。私は今成人のことにふれようとは思ひません。漫性病のものは名國手を要します。又赤を自分の生活資料にしてゐる人は普通の人以上にそれに對する批判は出來てゐる筈ですから。子供のたゞ一時の熱位ならば、それが思想問題でも戀愛問題でも、又は他の如何なる問題でも、母親が應急手當をしてほしいと思ふのであります。

それもさうだが、母親は我子を療治する時さういふ言葉を以て緩和劑とするのです。一つには個性尊重の意味を以て、一つにはやをら自分の說を吐かうとする前提として。處が子供は、この語を金科玉條と心得ます。母親も自分の氣持には贊成してゐる。それもさうだといつてくれた。これではいくらこま〳〵と諭して見た處で、もう聞いてはゐない筈です。抑揚の法で、あとでそれを抑へで斷定するといふ風なことは、生憎子供には通用しません。疑問の形を以てはじめて、自己の判斷を促すといふ樣な論法も、全然役に立ちません。劈頭第一、決定的の言葉を與へることが一番大事であります。

私は敬服した一人の母親の話をこゝに揭げたいと思ひます。さる軍人の家庭でありますが、父は型の如く、武骨で斷定的で、自己の說を固持して、一步も讓らない人でありました。我子にも非常な嚴格さを以て臨んで、その成績のいゝ聰明な子を自分の後繼者として軍人たらしめんとしたのでした。しかし子はどうしてもこれを肯ぜず、中に這入つた母親は、擧措に迷ふ有樣でありました。處がその子は一の趣味として、映畫俳優の寫眞を集め、又その入達の記事を切拔き、それ

を非常な樂としてゐました。幾年かの努力が積り積つて、隨分なかさとなりました。古行李に二杯は、彼にとつて非常な嬉しい收穫ではありましたけれど、嚴格なる父の眼から隱すのは、並一通の苦勞ではなかつたのでせう。然して事は遂に敗れました。父はけがらはしいと考へられる、この數年苦心の結果を、庭に放棄し火を放ちました。煙の末を恨めしげに眺むる青年盛りの息子の面を見ては、母も涙のあふるゝ心地でありました。父の去つた後、子は絶望の極、母に向つて叫びました。「お父さんはあんまりだ。私の趣味を侮辱し、私の未來をふみにじつてしまはれた」母親は同情の語が胸をついて出でんとする時、グッとこらへました。可愛想に！もつともだと同情してやらなかつたら、一層の悲しみに落るかも知れない。自暴自棄に陷るかも知れない。然しこゝが大事の瀬戸際だ。……暫くしてから云ひ出した言葉「お前は苦しいといふが、父親はそれ以上の苦しみだといふことがわからないか。父親の心持を察することは出來ないか。こゝに燒かれたものは又集められないこともあるまい。でも父親は、お前の幼少の時から成人

を樂んで、軍人として國家に獻げようと考へ、常にその精神を培ふことに努められたのであつた。然るにお前は、全然別の道を執つた。父親の永年の苦心を地に委してしまつた。この取かへし難き悲しみに、父親がいかに悶えてをられるか、苦しんでをられるか、その心は察し得られないのか」母親のこの言葉によつて、息子は飜然として既往を悔いたのであります。今眞面目な會社員として働いてゐるこの息子は、親孝行ものとして聞えてゐそす。父の不在中は陰膳に心からなる禮をしてゐます。（九月十日）

教育の効果

若し學校の數を以て、國民精神向上のバロメーターとするならば、今日は恐らくその極盛の時代でありませう。然し私は、今日の教育の効果を疑ひます。道德行爲が教育程度と一致してゐるか。否。幸福なる生活が教育程度と一致してゐるか。否。無智のもの丶方が正直であつたり、知識の進むに從つて、科學的犯罪がますといふことは、蔽ふべからざる事實であります。

私が保土ヶ谷にゐた時の事でありますが、大事な手紙を書いて、ポストに入れようと思つたら、どうしても見つかりません。途中で落したのかも知れないが、何にしても金錢問題ではあるし、仕方なく書き直して出すことにしようと、考へてゐた中に、不思議にも先方から返事が來ました。この事實を女工に話して「恐

らく道に捨てゝあつたのを、誰か親切な方が、ポストに入れて下さつたものだらう。今まで嬉しいことも色々あつたが、こんなに感じたことはない。切手を剝して、あとを捨てられても仕方がないのに。本當にこの事は一生忘れられない。先方の方もそれだけの親切な心持を持つてをられること故、表面お禮を云つてもらふよりも、私がかうして陰で感謝してゐることを喜んで下さるだらう」といひました。そして「右の手のなすことを、左の手に知らすなかれ。さらば、隱れたるに見給ふ汝の父は、あらはに報ひ給はん」といふ聖書の句を話して聞かせたのでした。ところが、その夜一時頃でしたが、一女工が來まして「先生新聞紙を下さい」といふのです。消燈は八時で、あとは廊下のほの暗いあかりだけですが、それを便りに便所掃除をしたものです。私どもだつたら、いはれたらすぐするのは反つて恥しいと思ふけれど、そんな點は少しも考へないで、實に露骨にやつてしまひます。成程と感じたらすぐ自分も實行します。その無邪氣な心持を、馬鹿正直といふ風な語で、評したくはありません。教育で虛飾されてゐない人に、かう

いふ點の多いことは、考ふべき事實だと思ひます。この手紙一本の話は、時々聞かせたので、隨分きゝめがありました。それからこれは、青山の學校にゐた時のことですが、スミス飛行機の見物の爲、代々木に數人の生徒を連れて行つたことがありました。私の外に、今一人の教師がついて居られました。と見ると、先を歩いてゐる大學生の背中に、糸屑が麗々しくついてゐました。取つてあげたい。然し何だか手が出ない。その時一人の背の高い生徒が、つとよつてそれを取りました。學生はふりかへつて嫣然しました。「でしやばりですね」と一人の先生にいはれた時、私は相槌がうてませんでした。やむにやまれぬ親切を、惡いといふわけにはゆかないと思ひます。これは女學生の一行爲でありますが、多くの場合、かういふいゝと思つたらすぐ行ふといふ勇氣が、女工などの方に多いのは、再考の必要があると思ひます。嘗て自由販賣を試みたことがありましたが、端書、齒磨、草履、鉛筆など、ほんの日用品ばかりでありますが、或女學校での成績と、女工のそれとを比較して、不思議に感じました。前者がとかく計算があはなかつ

たのに對し、後者は一厘の違もなかつたのであります。これは敢て、女學生が不正直だといふのではありませんが、大事に思はないからいゝ加減なことをして、おつりなどを間違たりするに比し、教育程度の低いものが、正直にしなければと考へる點から、正確にゆくといふことは、考へなければなりません。

私の勤めてゐた工場は、絹撚會社でありますから、他から委托されて、生糸の何本かを撚りあはせて、經糸を作るのでありました。百匁の糸は、およそ八匁の撚べりを豫想する爲、仕上九十二匁を普通とし、受取つた額によつて、出來上りの糸を取引することになつてゐます。然るに日々非常なむだが出來、會社は缺損つゞきでありました。やかましくいへば、餘計むだにする傾向があります。それで出來上りと屑糸とを比較して、報酬を與へることになつたが、あまり効果がありません。つまり屑は少いけれど、仕上の目方は多くならないのです。私が勤務したはじめ、一番先に心配したのはこの點でありました。糸繰機械を幾臺か並べ

て、女工が一人づゝついてゐる。糸が切れた時、ぐつと手ぐつて、つなぎあはせれば、そこにかなりの屑が出る。結局は人の物だから、面倒ならいくらでも屑をこしらへることになります。然し屑糸の目方が少いだけ、成績がいゝとすれば、こゝに矛盾が生じます。その爲女工は、自分の手で出來た屑糸を、屑入に入れるかはりに、他の方法で捨てることを考へます。當然こゝに行はれる方法は、丸めてポケットに入れ、便所内に投入することであります。屑糸は又再製することが出來ます。然し便所内で糞尿に交つたものは、徒に邪魔物扱を受けるばかりであります。これは日々のことでありますし多人數のことでありますから、年に積つたら、それこそ非常な損失でありました。私は自分の授業の時間に、物の貴さを說きました。献身物な蠶の生涯、微妙な繭の創作、出來上る糸の價値、そして、不注意の爲不親切の爲、その價値を失つて、一段低いものとなる屑糸の運命、然も便所内に捨てられ、いつまでも腐敗しないで、邪魔扱を受けるその仲間、勿體ないことすまないことにつき、循々と說き聞せました。然して幾何ならずして、

全體の成績がズッと上りました。計算して見たらば、八匁の撚減が七匁といふ好成績を得ました。これは直に金額にあらはれました。銘々が自己の責任を自覺して、作業上に親切な心を持つた爲、冥々の中にこの大なる形を現すことになつたのであります。會社側からは、非常な感謝の心を寄せられましたが、私としては金錢問題以上に、女工の精神を嬉しく思つたのでありました。

人としては感謝の念が大切だと思ひます。然しそれが中々むづかしいのです。大體女工達は喜ばせ易く、少しの好意でも嬉しく感じます。恩誼を感ずるといふ點は、苦勞を知らぬものには中々出來にくいことであります。昔有馬の溫泉場に二軒の駕籠やがありました。ありがたや、なさけなや。これは恐らく本當の屋號ではなかつたでありませうが。或時攝津の殿樣が癢症の氣味で、お忍びで出かけられ、一ヶ月滯在の後全快されました。迎の駕籠といふわけにもゆかず、その土地のを雇ひたいといはれました。宿屋の主人は色々考へましたが、一方は何でも

悲觀的だから、この選に洩れたと思つたら、さぞ悲觀するだらう。然し一方はすべてに親切である。殿様のこと故、中途で不都合があつても困るから、やはりこの方にしようときめました。今でいへば午前二時頃、主人がその家を起して、三時に仕立てゝくれる様に頼むと、お早うございます。毎度有難うございますといふ。そしてすぐに家中を起して、大事のお客だ、皆起きて仕度せよ、殿様のことだから鄭重に、ハッピも足袋も新しく、駕籠には蜘蛛の巣はないか。と、家中で準備して、幾分もたゝぬ中に宿屋まで飛んで行きました。駕籠は少しもゆれませんが、駕籠かきは汗ビッショリ。御苦勞だといへば、有難いことでございます。汗の出るほど働かしていたゞいてといふ。雨がふつて來たら、有難いこと百姓が喜びませう。その中石の角でつまづき指先から血が出ました。あゝ有難いこと、殿様をなげでもしたら大變でしたといふ。それから梨畑といつて、いつもは晝食をとる場處に着いたのが今の十時頃。ゆつくりして晝食になりました。ありがたやの主人が、おめでたい歌をさし上たいといつて、

有難や有馬のお湯のかへり路
病はこゝで梨の木の花

殿様は非常にお喜で、有難やといふ暖簾を下さいました。扨一方の駕籠やは、その事をきくごとに、宿屋を恨んでゐます。その中相當の客があつたので、今度はそれを頼むことにしました。ところが、朝起されて、情なや、孫子の末までこんな商賣はするものではないといふ。不機嫌で事ごとに、情なや〳〵を連發するので、お客も閉口してしまひました。梨畑に着いたのは一時すぎ。お辨當のお菜が不公平だと怒つては見たものゝ、こゝで歌をよまなければ、金儲にはならないと思つて、

情なや有馬のお湯のかへり路
生命はこゝで梨の木の花

幸福は心の持方であります。感謝の眼を以て見れば、何でも有難やであります。ところが、この感謝の念は、心のまづしき人に起ります。惠まれざるもの逆境

に立つ人は、しみ〴〵人の好意を感じます。

落ぶれて袖に涙のかゝる時
人の心の奥ぞしらるゝ

心の驕れる人は、すべてを惡化します。學問をした人に、社會主義者が多いのです。二宮尊德翁やリンカーンの一生を考へて見ると、不平をいひたい場合が、いくらもあつた樣に思はれます。然しすべてに不平不滿を持たなかつたから、否進んで感謝の念を持つてゐたから、あれだけの仕事が出來たことゝ思ひます。いつか私が、天津で他を訪ねようと思つて車に乘りました。トンヅル二枚（我銅貨二錢にあたる）で、どこまでも行くと聞いてゐましたから、それだけ渡したら、喜んで受取りました。次に同じ家にゆく時、又同じ樣にしたら、その車夫が怒りました。考へて見ると、先の人は體格がよかつたから、遠いと思はなかつたのでありませう。圓タクでも、同じ五十錢を、笑つて受取つてくれる人と、癪にさはる顏をする人とあるが、大體體力的に疲勞が標準になることでありませう。肉體

でも精神でも同じ事であります。姑に事へて堪へられないといふ人と、平氣でゐる人とあります。して見れば、肉體的に精神的に强さを持つた人が、苦痛に堪へらるゝのであるし、進んでは感謝の念にひたり得るのであります。この鍛錬をする爲に、我々はどの學校に這入つたらいゝものでせうか。

知行合一といふことは尊いことでありますが、この知り方が、多くの場合淺薄だから行へないのです。今の若い人は中々わかりがいゝ、一をいひかけると、十のことまで判ります。そして自分は知つてゐると思つて安心します。そのまゝ實行には移らないで、すんでしまひます。本當にさうだと心からしみ〴〵と感じた事には、非常な强さが伴ひます。今朝の新聞で見たのでありますが、或娘が嫂と喧嘩して、腹立まぎれに家を飛出し、有金も費つてしまつたその擧句、圓タクでも乘りまはせと交渉に及んだので、機轉のきく運轉手が交番につれこんだ。金がなくてどうして乘るかと聞いたら、お金なんかなくつたつて乘れる、欲しいも

のがあればやるといへばいゝと云つたとの事。道學者に聞かせたら、卒倒するだらうと思はれるかうした事實が、世の中にあり得るといふことは、驚き入つたものであります。これはやはり、貞操の尊さを敎へられて、知識としてのみ知つてゐるが、感情上心を動かされてゐない證據だと思ひます。私が子供の時、香のかぎわけといふことを、一種の趣味として人がやつてゐました。私もその仲間に入れてもらひましたが、その爲に嗅覺がどれほど發達したか、私としては何の効果も認め得られませんでした。然るに其後、志を立ゝて鄕里を出た時、旅費の用意がありません。漸くやすい船に乘りましたら、食事の費用は別だといはれました。その爲、空腹をこらへて神戸に下りた時、嚢中に一錢五厘這入つてゐました。こんなわけで、非常な飢饑にせまられて、六甲山の麓を歩いてゐました時、釜の飯をうつすにほひが、たまらなく鼻について來ました。恐らく遠方の百姓家からでも、にほつて來たものでありませう。私の鼻は異常な苦痛に對して、微妙な發達をしたものと思はれます。本當に眞劍にならなければ、本當に知ることは

出來ないものであります。それからの私は、自活の道を立てながら、あれもこれも習ひたいといふ要求で、人が三年ほどかゝる勉强を、半年で終へてしまひました。さういふ欲望にもえてゐる時は、何でもズン〳〵覺えられます。九死一生の場合には、神經の一端に或偉大な働が起ります。百萬の形式敎育よりも、實際に卽した勉强の方が、役だつものであります。丁抹の百姓大學講座といふのは、我國でもこの頃試みられてゐる想で、花嫁學校も、千葉や山形に、開校されてゐるといふことであります。それ等の人々の眞劍の勉强は、卒業證書といふ一枚の紙を目的に暮してゐる人と、非常な差があるといふことを、思はないわけにゆきません。

ビスマークは、普佛戰爭に勝つた時、これは小學敎員の力だといつた。といふことであります。本當に國民敎育が普及して、國民的精神が鼓吹されてゐれば、國民としてこれほど力强いことはありますまい。然し日本全國の小學敎員の方々

の中、ビスマークに感謝される資格のある人が果して幾人あるでありませうか、根本に多少でも誤謬があれば、それ以上の教育機關で、いくら努力して見ても、割合勞多くして効薄しといふことになるでせう。まして今日の中等教育は、本當の準備教育であつて、それ以上の教育は、高等遊民養成の機關を呈するに至つては、我また何をかいはんやであります。それでもまだ學校の數が不足してゐるといひます。受驗準備の本に羽がはえ、準備中と稱する學生が、街々を横行してゐるかと思へば、學校卒業後の就職運動に、眼の色をかへた人が、何と多くゐることでせう。地方で或相當の生計を營んでゐる家であるが、「家族數人の生活の爲に支出するものは、月四圓五十錢位であるが、娘の學資には月五十圓送附の必要がある。農家に現金は貴い。山なす米の俵は一ヶ月づゝで驚くばかり減つて行く」といはれました。これが地方の現狀でありませう。これらはまだ、生活を脅すことはないでせう。けれど、家によつては、山を賣り田を典して、その子の卒業後の月給を夢みてゐます。然るに卒業後飲ます食はずで働いたとしても、支出し

てもらつた學資が、何十年の後取かへせるものでせう。何といふ悲慘な事實でありませう。處で今日の報酬は、一般に勞作の量に比例してゐる樣であります。小學校教員より中等教員の俸給の少い場合もありますし、大學卒業生が、もつと低い報酬で勤めてゐる、といふ奇現象もあります。今日の狀態でいへば、生活に餘裕のある人のみ、趣味とか品位向上とかの意味で、高等教育大學教育を受くることが至當であります。それにしては學校は多きにすぎます。事こゝに至つたのは果して誰の罪でせうか。世の親なるものが、先自覺して、學校萬能の弊を知り、我子を人となす爲に、我子に職業を得しむる爲に、どうするのが一番いゝかを、眞劍に研究する必要があると思ひます。（九月十二日）

何を標準として子女の學校を選ぶべきか

男兒立志出鄕關　學若無成死不還
埋骨豈期墳墓地　人間到處有青山

篤學の志やむにやまれず。笈を負うて、或は京都に或は江戸に、又或は遠く長崎まで遊學した頃の學生は、本當に火の出るやうな勉强をしたものでありました。今日一つの裝飾として、又職業を求むる方便として、神聖なる教育を弄ばんとすることは、實に嘆かはしい至であります。世の親が、我子に學生といふ榮冠?を戴かしめんとし、一方その要求を充す爲、各種の學校が門を開いて待つ、といふ今日の世相について、私がいくら慨歎しても、役に立つことではないであります。私はたゞ、教育は人を作るといふ標語のもとに、小學教育中等教育の學校選擇について、考へて見たいと思ひます。小學教育は、全國一致の國民教育

でありますから、就學兒童の範圍も極り、自由選擇を許されないのでありますが、かなり心配なものも見うけられます。地方の農村などに奉職する先生が、標準語を普及させようといふ努力は、實に感謝の至でありますが、その土地に對する尊敬とか同情とかを持つことが出來ず、二言目には、田舍だとか百姓だとかいふ語を出し、又さういふ風に思つてゐるといふことになると、甚しく兒童の自信を傷け、卑屈に陷らせることになり、他日我鄕里を捨て去る素地を作ることになりはしませんでせうか。現に私共の住んでゐる郊外でさへも、兒童が舊市內の學校より、一段低いものゝ樣に思つてゐる傾向があり、寒心に堪へません。洋裝で大手を振つて歩いてをられる女の先生を見る時、あの先生がどこまで農家といふものを、理解してゐて下さるか、誠に心配に存じます。それから、色々細工をして、わざ〳〵子供を他に寄留させ、その目ざす學校に入學せしめようとする親もありますが、幾組かある學級の先生によつて、それ〴〵特色があつて、自分の望むことが、果して遂げらるゝか否かわかりません。この點は豫め承知して置かねば

なりません。それから、種々の主張のもとに、特別に立てられてゐる學校については、單に評判だけでなく、內容を精細に研究する必要があります。つまり我々の個性を知つて、それに適合するや否やを見るのが、最大切なことでありませう。但し個性尊重といふ名のもとに、一學級中のものが、勝手氣儘に、自分のしたいことをやつてゐる、といふ處があると聞きますが、これはかなり危險なことゝ思はれます。

最自由で又最選擇に苦むのは、中等學校であります。公立か私立か。これが一番大きな點であります。公立としても今日迄の歷史が、一の校風を作りあげてゐます。まして私立といふことになれば、それ〳〵設立者の意志が學校の氣風に反映してゐることでありますから、最公平に冷靜に、研究することが大切であります。今日一時の現象かも知れませんが、眞面目に眞劍に、着實に經營してゐる學校は、希望者が少く、場あたりで尖端的な、旗幟不鮮明なものゝ方が、多數入學生を迎へるといふことは、殘念なことであります。全體學校が、大きく廣告

しなければならない樣なことは、情ない次第です。尙、男なら上級學校入學率の多い學校、女なら嫁入の時聞かれて、恥しくない名の學校、といふやうな選び方が、果して正しいものでありませうか。次には我子の性格と成績とが問題となります。我子の個性を考へて、それを延ばしてもらふ爲に、適當な處を選ぶといふこと、我子の成績が、他と並んでゆかれ、なほ漸次進んでゆかれる程度の處を選ぶこと、これらは親として忘れがちのものではないかと思ひます。聞く處によれば、小學敎員は、親の名聲によつて、その子の入學志望の學校を定めなければならない樣な習慣になつてゐるといふことであります。これが事實とすれば、その敎員は、內心隨分苦しいことだらうと思ひます。親はその邊の消息を知つて、時にはその折角の親切をも、斷らねばならないのでありますまいか。それから親の職業と生活狀態も、學校選擇上考慮せらるべきものであります。私どもでも覺があります、生徒に接する場合、この容貌といふやうなものは目に這入らず、話が解るか解らないか、成績がいゝか惡いかばかり考へる場合が隨分あります。

同時に成績良好の子であると、家庭狀況などは忘れて、專門學校に入れてほしいなどゝ思ひ、家庭にも勸めて見たくなります。それ故、小學校の先生が、我敎子について、さういふ風に見るのも無理のないことで、何でもいゝ學校に入れたいと思ふ。先生の勸で考査を受けた。這入れたとしてあとの資力がつゞかないで半途退學しなければならない樣なことが出來たり、それでないとしても、お友達の家に遊にゆくのが、氣が引けるといふ風になつたり、いじけた心持になると、その爲專心勉强が出來なくなる。これは子供の一生にとつて、非常な悲慘なことであります。要するに、子供に適應した學校、家庭につりあつた學校を選ぶことが、最正しいことで親切なことであります。

この第一條件の次に考ふべきは、通學距離と學校所在地の環境とであります。これは第二の問題といひながら、非常に影響の多いもので、場合によつては、その爲に、相當適當と考へた學校をも、斷念しなければならないほど、重大な關係

を持つものであります。距離の遠いことは、時間の不經濟、心身の疲勞といふことと以外の、惡影響を持ちます。徒步通學であるならばともかく、電車なりバスなりを利用するとすれば、毎日緊張してばかりも居られない爲、不良少年にすきをねらはれることになります。假令愼といふことを、家庭で學校で、敎へられてゐたとしても、若い人特有の好奇心といふものゝ、動く場合もあり得ることであります。それから相當長時間に涉ると、一寸寄道しても、あまり影響がない樣に思はれ、或は友達に誘はれ、時には自分が誘つて、喫茶店に入るとか、デパートをうろつくとかいふことも、起るかもしれません。今一つ、學校所在地の周圍が雜踏した町であるか、閑靜な地であるかは、甚しく影響を與へます。映畫館の前を通れば、つい看板を見る氣にもなります。喫茶店の前を通れば、お八つ時だといつて這入つても見ます。これはいゝの惡いのといつて判斷する迄もなく、フラ〳〵と行つてしまふのです。頃日所用があつて、東京の繁華の場所を通つたら、折ふし土曜日の午後で、附近學校の放課時間頃と見え、制服の處女の多くを方々

で見かけました。わき目もふらないといふ風な人は割合認められなかつたので、私も好奇心から或店に這入つて見ると、ぎつしり詰つてお茶を飲んでゐる人が、殆すべて男女學生でありました。それからお互の言葉遣のきたないこと、女だてらに僕、君といふ對話をしてゐます。實際これを耳にした時に、今更ながら驚いてしまひました。親は我子を學校に出して相當心配してはゐるかも知れないが、恐らく、こんな處でこんな對話をしてゐようとは思はれないのでありませう、但し、歸宅時間のことは、學校としては、隨分なやみの種であつて、どこでも、家庭に對し、嚴重取締を依頼するわけであるが、所要時間がどれだけで、何時には家に着くべきものだといふ樣なことを、本當に注意してゐない家庭が、かなりあるとのことであります。時には、刑事の手帳に乘つて、黑表をつけられてゐるといふ男女學生でも、家で知らない場合がかなりあります。學校にゆくといつて、お辨當を持つてきまつた時間に出かけてゆく。他で服裝をかへて、終日遊びあるく。歸宅時間は割合正確だ。疑ふ餘地もない。こんなのも、はじめからそれほど

大膽の人はありません。最初の一歩を謬つて、然も親をだまし得た處から起ることゝ思はれます。故に親としては、萬一の場合を慮つて、通學時間のかゝらぬ處、學校周圍の比較的嚴正な處に、子女を托すると共に、日々注意を怠らず、十分學校との連絡をとることも、考へなければなりません。

かういふ風に考へて來ると、地方から、青年子女を手離して、都會の學校に通はせるといふことは、實に恐ろしいことであつて、頭がいゝとか物が出來るとかいふものにとつて、多少の損失はあらうとも、自分の手許から近い處に通はせるのが、最安全な方法であります。しかも東京あたりの生徒の學力は、一體に地方のそれに劣つてゐると思ひます。これは、向上心に燃えるのと然らざるとの相違と考へられます。親としては大に熟考の餘地があるでありませう。（九月十三日）

家庭教育の權威

教育は人を作るのであります。然し人である事と同時に日本國民であること、同時に我家の子であること、これは親として最忘るべからざることゝ思ひます。家は國家の單位であります。我家の祖先の踏んだ道、現在の家の位置職業、それに適した樣に我子を教育する。これが教育の本義であります。國家觀念を植ゑつけるといつても、學校の樣に歷史の時間を設けるのではありません。祖先の話などは、常住坐臥の間に聞かすことが出來ます。家の職業については、家中の人がそれを尊重し、それを熱心にしてゐれば、それが大切なものだと一々いはなくても、子供に解るわけであります。母親は特にこの教育者としての責任を自覺して一の宗教的信念を持ち、變らざる理想を見つめて、大膽にしかも小心に、この大なる仕事に努力して戴きたいのであります。家庭教育は、學校教育の如く一定年

限はありません。然し特に必要で効果的であるのは、白紙狀態の幼兒の頃であります。私どもは土地の習慣で、幼少の時背中のちりけに、やいと(灸)をすゑられたのでした。そのもぐさは實に小さな塊でありますが、そのやいとのあとが、今は直徑一寸位になつてゐます。小さなものは年と共に大きくなります。小さな習慣が人の一生を支配します。このやいと式によい躾をやきつけることが出來れば、家庭教育は、半以上終つたものであるし、又所謂人物教育もその大半をしあげたといつていゝのであります。私は嚴格な祖父によつて、佛壇を大切にすることを教へられました。又門前の禮といふ事をやかましくいはれました。村を通る時、村長の門前、先生の門前に、必ず心からの敬意を表することを、教へられたのであります。この習慣は今日もそのまゝ存し、しかも擴大されてゐます。神社佛閣への禮は勿論、巡査踏切番等、公衆の爲に働いてゐる人に對しては、會釋しないではゐられないのも、その習慣からであります。學校ではじめて教へられる樣なことは、理論上肯定しても、感情上の役にはあまり立ちません。しみこん

だ惡い風習は、そんなことではなほるものではありません。物を大切にするといふことでも、單に經濟上の事柄のみではなく、精神的訓練と考へねば、何にもなりません。いつも〳〵同じことをいはれてゐると、何とも思はないやうですけれど、それが三度の食事の如く、あたり前のことゝなるから、起居動作でも何でも自然に出來上つて行くので、何を見ても刹那的の氣持は起らないし、人のことだからいゝといふ考になりません。私が銀座を歩く度に考へることは、もし自分が總理大臣だつたら、あの思ひ〳〵の廣告などは撤回させて、美術的な形と色合の調和された看板でも、立てさせることだらうと思ひますのも、餘計なおせつかひの樣ですが、お金ばかりかけてゐながら、どれもこれもくちや〳〵で、さつぱり廣告の役に立つてゐないことを、心から人事ならずつまらないと考へるからであります。「子供は立派な動物だから、體が第一だ。私は放任主義にしてゐる。譯が解るやうになつてからよく教へればいゝ」といつた母親は、自身教育があるといふ顏をしてゐました。そんな母親ばかりもありますまいけれど、職業を持つてゐ

る樣な人は、承知しながら躾がお留守になります。この頃或家主さんの話に、「學生の先生や教育を受けた奥さんなどに、家を借すものではない。家賃は家の損料である。緣側が汚くなつても、襖が破れても、その爲の損料を拂つてゐるからかまはないと、子供の前でゝも、平氣で話してゐます。實に打算的である。だから子供の亂暴を制さないのみでなく、自分も掃除など碌にしない。收入二十五圓位の勞働者であると。いくら子供が多くても、緣側はふきこむ。お釜は光らせる。敷居に疵をつけると、親の顏をたゝく樣なものだといつて叱つてゐる。何だか世の中がさかさの樣だ」といはれ、冷汗を流したのでありました。物を毀さねば遊べないとか、家を汚くしなければ運動が出來ないとかいふ法はないのです。他人のものは、ことに大切にすべきものだといふことは、借家すまひの人に、却つて訓練の機會が多いことになります。それから洒掃といふことは、子供の時からさせていゝことで、隅から隅迄綺麗になつてゐないと、氣持が惡いといふことは、習慣のつけ方一つであります。やりつぱなしの子供が中々ガッチリしてゐること

があつて、お土産一つ持つて行つても、誰にくれたのですと聞くのです。これは昔の樣に家といふものを敎へてゐない證據であります。そのくせ人のものは我物といふ顏をする。つまり利己主義に育てあげられてゐるのであります。良習慣をつける爲には、日常の起居動作から衣食住に至る迄、周到の注意を要するのであります。よく胃腸を惡くしたといふ神經質の子を、病院に連れてくる母親がありますが、大抵は偏食の結果漫性になつて、骨骼も全體に弱々しく、それこそ胃腸病だけでなく、一般の抵抗力がなくなつてゐるのでありますから、從つて精神にも、非常な大きな影響があります。少し勉强すれば草臥れる。少し困難に出あへば頓挫する。これは子供の素質と片づけてしまふ譯にゆかないのです。母親としての責任を問はれても仕方がないのです。

行儀作法は當然家庭で敎ふべきものであります。これは男兒と女兒との別はありません。ことに男兒は不行儀になりやすいのです。だから長じても紳士としての品位を保ち得ないことになるのであります。路傍の放尿なども、嚴重に注意す

べきであります。あたり前と心得るのは、實に奇怪千萬であります。それから、これは成人になつてからでありますが、歩きながら喫煙するのは、何といふ不體裁なことでせう。外國人は外で立喰否歩き喰もするのです。感情がせまれば、聲をあげて泣きもするのです。だから喫煙位何ともないかも知れません。然し日本人として、そんな不行儀なまねをする必要が、どこにあるのでせう。見なれてしまつたから、割合平氣なのでせうけれど、よく考へて見れば、實に恥しいことであります。

小學中等學校に行く樣になると、家に居る時間が段々少くなります。さうすると母親も、勢、學校に賴んだ氣になります。自分の敎育の範圍をおろそかにする樣になります。かししその子が、當然何々學校の生徒であらうとも、同時に我家の子女であります。抽象的一般的の事は、學校で敎へてもらへるでせうが、特殊のことは母親が敎育すべきであります。全體作法とか裁縫とか割烹とかいふものは、家庭の代理として學校が敎へてゐるのであります。それ故、せめて實習は、

家で十分にさせなければいけない筈であります。

中等學校も上級生になると、親が子供に一歩讓る氣持になります。然し親にもさうした時代があつたのです。色々な學科によつて、學習してゐた時があつた筈です。假令、現在子供の習つてゐることが、親の記憶にないこと、理解の出來ないことであつたとしても、その一事で子供より劣つたと考へる必要は、毛頭ない譯であります。學校での學習は、人の修養の或一部である。それは決して誇るだけの價値あるものではありません。親は常に一足高い處から、子供を見てゐなければいけません。生意氣盛りの子供でも、自分より大きいものは欲しいのです。自分より强いものはほしいのです。力競する樣な氣持だの、子供よりもつまらぬものと、あきらめてしまつてゐる樣な態度を見ることは、寂しいことに違ありません。相手にならないで、笑つてゐる親の面前に立つた時、底知れぬ畏敬も起つてくる譯でありませう。どこまでも監督の位置になり、責任を自覺してゐれば、一擧手一投足に、子供の心の動が察しられます。持物に耽溺書籍にそして交友

に、心の動搖を認め變化を認めたならば、適當な應急手當を怠らぬこと、それは父親に相談するもよし、學校の協力を求めるもよし、唯心配してゐるばかりでは何の役にも立たぬものであります。

五年程前の事でありますが、私は或卒業生から、一つの封書を受取りました。狹い封筒の表には柳の畫があつて、裏に宛名と差出人とが書いてありました。それを見た私は非常に不思議に思ひました。この人は眞面目な生徒であつたのに、この封筒を見ると、人間が少しの間に何と變つたことでせう。でも封筒だけで速斷は惡いかも知れないと、あけて見たらば、煩悶してゐるとか見すてられたとかいふ言葉が「ですわ」風の文で記されてゐました。やはり封筒と內容とが一致してゐた。これで見ると、人間がこんなになつたものかしらと、心配に堪へられませんでしたので、秋の事でしたが、外苑のマスゲームのかへりに、その人の家に立寄つて、玄關に這入つて見ると、ハイヒール、日傘、下駄、羅紗に刺繡のキルクの草履、何も〳〵前のその人を考へては、想像し得られぬものばかりでした。

取次いでもらつても、中々出て來ないで、暫くすると、斷髪で眉毛をぬいたその人が、黑地に赤いあくどい身なりで出て來て、友達が來てゐるといふ。類を以て集るとか、その友達といふものも、皆同じ樣な人だらうと、がつかりしてしまひました。言葉遣も筆つきも、着物も持物も、すべて人格のあらはれであることを考へると。毎日一緒にゐる母親の眼には、すべてが隱し得られない筈だと思はれます。買物一つにも注意して、心の變化を見ることが大切と思はれます。今一人これは在校中隨分モダンで、髪や着物も他と違つた樣子など見せて、かなり心配させられた人が、溫和しく店のものを婿にして、立派に親の商賣をついで行つてゐます。これは小さい時から、手堅い商人の中に育てられ、母親の教育がよほどしつかりしてゐたものと見え、家の暖簾大事と、日本髪に黑襦子の襟をかけ、發音迄が商人風になつてゐます。青年期に一度、危機に臨んだのでありませうが、母親が昔氣質で、生じつか理解の何のといはずに、終始一貫舊習を守り續けた結果、その立派な態度に、娘もいつか化せられたものと見えます。これは知人の話

でありますが、神樂坂の老舗の家で、おかみさんが非常にえらく、片腕となつて身代を立派に持續けてゐたものでありましたが、主人の死後、子女を教育した擧句、二人の男の子は、家業をつぐのがいやだといつて、皆他の職を求めてしまつたので、末の娘に養子を迎へて、跡をとらせた處が、その夫婦も幾何ならずして大番頭に店を讓つてしまつたとのこと。五十圓でも六十圓でも、役人になつた方がいゝといふのでありました。處がこの大番頭は、十年の月賦で賣つて貰つて、今盛にやつてゐるとのことですが、然しその月賦などいふものが、どこまで信用されるものかわかりません。結局夫に對しての賢夫人も、子供には理解がありすぎて、順應しようとした結果、いつまでも家業をもりたてゝ行くといふ考がなく、家の基礎を危くしたことになつてしまひました。私は親は子故の暗に迷ふといひました。然しその愛の極、いつも〳〵間違なく子を守ることになり、絶えざる祈が、子供との間の絆を、一層强いものとすることが出來ると信じてゐるものであります。子供に負けてしまつては、親としての價値がなくなつて了ひます。

家庭教育中、最大切で最忘れられてゐる、否、手がつけられないものは、男の子の性教育でありませう。少年が青年にならうとする時、卽聲がはりのする時期には、今までと違つた心持が色々起つて來ます。どうしていゝかわからなくなり、友達同志話をすると、最手輕な解決法を敎へてくれます。然しそれが實に恐ろしい結果を生むもので、一番最初を辛棒することが最大切なことだといふことを、しみ〳〵云つて聞かせなければいけません。それが如何に後に影響するか。手近な處でその疲勞の極が神經衰弱を起し、頭を鈍らし、學校成績が低下するといふこと、を母親自身が謹嚴な態度で談るべきであります。七月號の婦人之友に出てゐた或青年の手紙といふのは、實に眞摯なものだと感じ、同時にそれを相談された羽仁女史には、心からの敬意を表します。あらゆる青年が、皆これだけの眞劍さを持つてゐたならばと、願はない譯にゆきません。事實これは天賦なので仕方がありませんが、その年頃には、電車に乘つてゐても、道を通つてゐても、

女が目につく相で、女のにほひがたまらなく刺戟を感ずる相であります。姉のある人は、割合それになれ好奇心を起さない樣でありますが、妹を持つてゐるものは、妹を通してその友に接する機會も多く、不可抗力に誘惑されることが、ありがちのものでありませう。

私は經驗のない事を想像するのでありますが、男子がはじめて性慾の起る時、一度でもそれを抑制し得なかつたら、二度目三度目と、一層强い要求が起るだらうと思ひます。母親が子供に乳房を含ませる時期には、時間が來れば乳が張つて來る。飲まれゝば快感を覺える。子供が寢てゞもゐると、張り過ぎて肩が凝つて來る。それが過ぎると病的になつて來る。然しはじめから、乳房を含ませないことにすると、いつの間にか乳があがつてしまふといふことです。この二者は少しも變らないものではありますまいか。自然は種族繁殖の爲、かういふ風に男女のいづれもに、非常な强い力を與へてゐます。然し必要のない場合には抑制し得らるべきものであります。私は幾度か、その年頃の青年に對したことがあります。

こちらが眞劍の態度で、その弊害を數へたてると、聞手は顏を赤らめ涙をこぼして感激します。天から與へられた大任を果す爲には、非常な眞劍さと努力とが要るもので、そこに人格の光が現れるものであるといふことは、感激性に富む青年には、すなほに受納れられます。青年が年長の女に接近した時、その女が姉となり母となつて、眞實にその邊の機微を敎へるならば、隨分有効だらうと思はれますが、一度あやまると、却つて取かへしのつかぬことになります。願くは、他人に姉や叔母やを求めるその要求の起らない前に、母親がその子の爲に、これだけの敎育をしてほしいものであります。私ははじめての敎師となつて、群馬の田舍に奉職しましたが、それは山間の僻地であつて、型の如く風儀が惡く、それこそ若者が、皆直接行動によつて女性をおとなにするといふ習慣がありました。まだ若い時ではあり、土地のものは前々の例の如く、私が權力腕力の前には泣寢入でもするものと思つたらしかつたのです。夜中、直接談判にやつて來た若者の前に、けはひを察して手早く身づくろひした私が、つと電燈をつけた時のその光景

は、今思つても抱腹絕倒の觀があります。數日後私は、自分の年齡といふことを忘れて、姉らしい態度を以て、多くの青年に話をしました。その內容は今忘れてしまひましたが、結局誰も〳〵惡いとは知つてゐながら、惰性で行つてゐたことで、やめようといふ約束になれば、反つて氣易いらしかつたのです。その後青年會の約束が守られて、土地の風儀がなほつてゐましたが、今日はどんな有樣であります、消息を絕つてゐること故、わかりません。たゞ

「神の國は一粒の芥種のごとし人これを取りて己の園に播きたれば育ちて樹となり空の鳥この枝に宿れり」

といふ言葉を考へてゐるだけであります。

習慣の强さ恐ろしさにつき私は、もつと例を擧げて見たいと思ひます。近來玄米宣傳につき、色々の實驗談を聞いたので、自分も實行して見ようと、この春一ケ月半に涉つて、三度々々玄米のお粥を作つて食しました。處がどうしても身體

が受つけません。食慾は減る胸は變になる排泄の工合も惡くなりましたので、根くらべをした擧句、一先兜をぬぐことにしました。我々日本人が白米を食し出してから、何百年の年月が經過したのでせうか。祖先以來の習慣が、漸次胃腸を變化させてしまつて、これを原始時代の狀態にかへさうとするには、やはり或年月が必要なのでありませう。一ヶ月半はそれに比べてあまりに短い譯であります。これについて思ひ起される事實があります。私が群馬縣多賀郡三原村といふ處に赴任後、四ヶ月の後、藤岡といふ町に品評會があつたので、村長と小學校長とに相談して、品評會かた〳〵、汽車其他の見學をさせたいと思つて、補習科生を連れて、一泊旅行することにしました。私の行つた時、三十餘名だつた生徒が、その時百名にふえてゐるといふ狀態だつたので、喜んで許してもらへたのでありました。この村は、役場と學校との外、二軒とつゞいた家がないといふ僻地であつたので、生徒もこの旅行を非常に喜んだのであります。こゝは養蠶等を相當にやつてゐるので、比較的富んではゐるが、白米は土地で出來ない爲、御祭とかお

正月とかで、年數度赤飯にして食するだけで、不斷はひきわりと唐もろこしのお團子を常食にして、あとは野菜だけといふ生活振でありました。引率者は校長と男教員と私とであつたので、自分は食事その他のことには、全責任を負うた考で、一人前一圓五十錢(內村費九十錢)といふ金を預り、この人達に、何を御馳走したら喜ぶだらうと、そればかり考へてゐました。鬼石まで山間の細道四里、あとは藤岡までガタ馬車がありますが、生徒を乘せるだけの數がないので全然徒步した爲、朝出て四時に漸くつきました。早速宿にかけあつて、白米にお刺身と附燒魚といふお獻立で食べさせたら、さつぱりお鉢がへりません。中には井戸側で吐いてゐる子もゐます。私は本當に困つてしまつたので、又宿に賴んで、麥飯に鹽鮭、香の物の山盛をつけて出してもらつたら、皆はそれこそ大喜でした。過去の習慣は實に恐ろしいもので、違つたものは要求しない。それ位ではない受つけないのです。その場合榮養價は問題ではなくなります。第二の天性となつたものは、善惡の批判どころの話ではありません。(九月十五日)

傳統の力

私は至る處に別々の生活様式を見ます。そしてそれは大體その儘でいゝので、強て一律にする必要はないものだと思ひます。明治維新後の日本人の様に、何でもかでも泰西を摸倣し、衣食住すべて追隨を事とし、しまひには自分の黄色い顔色までいやだといふ。それ位のことならまだよいのですが、我國の風俗習慣すべて、外國と違ふからこれは野蠻なのだらう。名實共に備つた君主國といふものが外に一つもないから、これもいけないのだらうといふに至つては、實に狂氣沙汰であります。或は又理論的にかくあるべきものと考へ、過去のすべてを破壞し、政治文物制度を理想化し、一の新世界を自分の頭で作りあげ、ユートピアの實現に盡力するつもりでゐても、生憎實際がその本來の目的と背馳する如き場合は、かなりあり得ることで、畢竟劃一的なものは、世の中に存在しません。森羅萬象

すべて特異性を持つてゐて、それがあらゆる場合に臨んで、それ〴〵の結果を生じるのであるから、差別卽平等である。差別の世界を認め、それ〳〵に善處する覺悟がなくては、身も修らず、家も齊はず、まして天下國家をやであります。

我國は三千年の過去を持つてゐます。光輝ある歴史を持つてゐます。我らの祖先はこの三千年の間に、色々の變遷を經て來ました。自然淘汰の法則によつて、殘るべきものが殘されたのであります。維新の改革も王政の復古であつたのであります。時勢と共に移るといふことは、正しいことであるけれど、暴力でぶちこはすことはいけません。無論進歩の道程に過渡時代はあり得ることだから、日々是好日といふことは、むづかしいことでせうが、大體に於て、溫故知新はあやまりのない眞理であります。國語を知り歴史を知り、すべての風俗習慣のよつて來る處を知り、その上で惡きを捨てゝ善きを取るといふことなら、たとへば、一つの植物の花を一層美しく咲かせる爲の努力ともいへませう。どん〳〵伐つて接木をするといふのでは、その木の壽命さへもあやぶまれます。綺麗な花が咲くか、

立派な實が出來るかどうか、そんなことが受あへるものではありません。それが又出來たとしても、それでは別なものになつてしまふ譯で、甚しく無意味なものであります。

習慣の力は強いものであります。傳統の力は侮り難いものであります。その力の強さは同時に又尊いものであります。祖先の血がその中に流れてゐます。どうしていゝ加減に變れるものではありません。そのことの起つた原因を確め、そこに新な生命をふきこんで、活力あるものに甦らせることが出來れば、美しくしかも力強き文化の華がいつまでも〳〵咲きそふことでありませう。

日本人の生活は一生を通じて、自然に對する畏敬の生活であります。感謝の生活であります。子供が生れますと、お七夜に命名の式を致します。これは神佛に對する奉告の形式をとるのであります。約一ヶ月の後、つまり外出し得る樣になつた時、氏神樣にお宮詣をします。そして神主の手によつて、氏子としてのお祈

をして戴きます。それからはじめて、親類緣者に挨拶にまはるのであります。三つの背合せ、五つの袴着、七つの帶の祝、すべて氏神樣におまゐりをすることになつてゐます。長じて後でも、氏神樣の祭禮に、揃の着物を着てゐる子供を見ますと、形のみならず心の上にも、氏神樣の加護を得てゐる樣に思はれて、嬉しいものであります。冠婚葬祭すべて、人と人との關係のみでなく、まづ見えざる大自然の前に跪かうとしてゐます。一年中の行事でもさうであります。年の始若水を汲んで祈る心持、年の終除夜の鐘の音に默禱する心持、更衣をするといつては子等の爲に夏のはじめには新しき浴衣を、秋のはじめには新しき袷をと、裁つ日にも着初る日にも、色々面倒な詮議をするのも、我子の行先の幸あれかしと、祈る氣持のあらはれであります。衣食住何一つでも、自分の力で自分が暮してゆくとは思はず、賜物に對する感謝の念と、又出世前のものを祝ふ心持と、書き出せばきりがない位であります。かういふことを、わざ〳〵記しましたのは、今の若い人達が、全然さういふ問題に關心を持たないのを、切に憂ふるからでありま

す。本當に人並の苦勞をして見て、はじめて人生の意義を知り、すべての傳統の尊さを考へることが、遲きに過ぐるを殘念に思ふ心からであります。すべて知らずして批評するほど、愚なそして危險なことはありません。

私は昔ながらの五節句を、おもしろいと思ひ、又それを殘しておきたいと思ふものであります。のどかな年を迎へた喜に、身も心ものびやかになつた時、野邊に若菜をとるといふことは、實に陽の極でありませう。不幸にして時がまだ寒く、しかも都會に於ては、土にも草にも所有者があつて、めつたに手を觸れたら萬引と間違へられるかも知れません。たゞ白馬節會ではありませんが、青いものを眺めるだけでもいゝと思ひますから、私はこの日を、別れた友が相よつて、郊外散歩をする日にあてたいと思ひます。春も酣に桃の花の咲匂ふ頃、女性は自分が雛祭の主人になれることを喜び、雲の上深き御生活を移したものを飾つて、自ら饗膳を供へてそれに奉仕し、つゝましい態度を以て、友達を遇します。若葉

の萠ゆる五月の空には、鯉幟が高く天に飜り、宇宙を呑まんとする慨があります。男性が「をのこわれ生けるしるしあり」と、天地に號呼するのは正にこの時であります。かくして七月七日には、うるはしくもやさしい儀式の數々を以て、天體を祭るのであります。清い空を眺め、うるはしい虫の聲をきゝながら、家族の一同がまとゐしてゐる時、男女兩性の清い結合が、神祕的な又嚴肅なものである事を、語り聞せるといふことは、小さい子供にとつても、相當年齢のものにとつても、最良い教訓を與ふるものであります。九月九日の重陽の節には、落ついた心持で長壽者を祝ひたいものであります。附近の人に對してゞも、敬老會といふものを、この日にしたいものと思ひます。あの棚橋絢子先生が、九十五歳になられて、なほ矍鑠たる優姿を仰ぐと、實に力强さを感じます。この間の祝賀會の時、鳩山春子先生が、「自分達は棚橋先生の前に立つと、母親に對する娘の樣な氣がして、非常に氣强く感じられ、もつと〳〵働かねばならないと思はせられる」といはれました。我々はまだ學ぶべきことが多い。なすべき事が多い。どうか丈

夫で元氣で、働いてゐたいものであります。「四十五十は鼻たれ小僧、男ざかりは眞八十」とか。これは石黑男爵が、常に口にされる言葉と聞いてゐます。男爵は今もなほ隱れたる侃侃諤諤の士として、健在だときくのは、昭代の慶事であります。

よく學びよく遊べといふ。これは私自身もよく口にする處でありますが、實際よく學ぶといふことは中々容易に出來るものではありません。とすればよく遊べばかり守つてゐるのもをかしなものであります。その點からいへば、今の日曜制より、昔の朔日十五日の休の方がいゝと思ひます。大阪のある實業家の話に「日曜を休む樣になつて、能率の低下したことは夥しい。その日だけの事でなく、翌日がその惰性で、十分の活動が出來ないとすると、倍の損失である」と。これは仕事が目に見える實業方面にとつては、最著しく顯れる事實でありませう。基督教國に於ける日曜制には、たしかに深い意味があります。六日間神の守によつて無事に業務にいそしんで、七日目には休息が與へられる。そして神に對する禮拜によつて感謝の意を表し、なほ今後の活動の力を得んことを祈る。從つて街の店も戸を閉して、それこそ嚴肅な一日を送ることが出來るのであります。然し我國に於ては、國情の違ふところから、さういふ風には考へず、特別與へられた休日として、大ぴらに遊ぶし、各店も不斷より華やかに顧客を迎へんとします。誘惑に勝ち得ずして、酒の味、煙草の味を覺えること、映畫を見に行くこと等により、罪惡の種がまかれ、墮落のスタートを切るのがすべてこの日であります。從來の朔日十五日は外國の日曜制と同じく、宗教的素質を持つてゐたものであります。この日は赤の飯をこしらへて神佛に供へ、皆もそれを頂き、そして尾頭つきの魚を以て食膳を賑はします。一方半月の間の自己につき反省する時が與へられます。それから常に美食に飽くものにとつては、食事は一の事務にすぎないのですが、勞働に疲れきつた身は、所謂惣菜にも美味を見出します。まして月二回と定められた珍味は、いかに嬉しいものでありませう。その上小豆によつて、腹

腹部を調節することが出來、身も心も爽かになるわけであります。これが一般的になれば、又前の様な弊害も起るかも知れませんが、度數が半減してゐることは注意に値します。

行事として定められたものには、一ヶ月中にもまだ色々ありませう。大阪地方では、月の十九日を觀音様のお日といひ、芽の葉と油揚とを煮て食します。これは通じをつけ髪の毛をよくする効があるといひます。又そのうで汁は入口にまいて、疫病を避ける呪とします。二十一日は大師さまの日といつて、お祭をします。かういふ風なことは、まだ處々に遺された風があることでせう。一年中でいへば、五節句の外に、二月八日の針の供養は、いとも小さなものに對する感謝の意を表し、中秋名月と後の月との月祭は、自然に對する畏敬の念を表し、いづれも優美な形式を備へてゐます。尙神社佛閣のそれ〴〵の祭にも色々な古風が殘されてゐます。かういふ風に季節により又土地によつて、習慣づけられたものは、

古くさいとけなす前に十分研究して趣味を味ひ、實利を得たいものであります。但し精神を失つてお祭さわぎに墮してしまふことは、嚴に注意しなければなりません。それから、大祭祝日についても、新しいものもありますけれど、大體には昔からの歴史傳統を持つものでありますから、單なる休日といふ様な意味に考へないで、その日その日にそれ〴〵の氣分に生きて行きたいと思ひます。(九月十六日)

お母様へのお願（其の一）

（昭和七年五月二十日放送）

世の中の事が、どんなに變化致しましても、たとひ子供が親に對する氣持に、相違が起りましても、親が我が子の幸福を祈り、その人格の完成を希ふ氣持には變化はないと思ひます。私達子女教育の任にあるものは、この眞實な、この深刻な事實を認識して、母親に對し、多大の責任を自覺して戴く事が、最正しく且、効果のあるものと考へます。

子女を教育してゆく事は、單に一家一門の爲ばかりのみでなく、立派な國家を作る要素になるといふことは、今更私が申すまでもない事であります。それならば、今日母親が何を標準として、この大なる任務を果してゆくべきであるかと考へます時、今日の世相は皆樣も御承知の通り、實に何を標準としてよいかわから

ないのであります。其教育問題は家庭の立場から、又國家社會の立場から、色々の主張もありますが、それ等は一つの學説であり議論であります。私は教育は議論よりも、實行でなければならぬと思ひます。

百の議論も、一つの實行には及びますまい。もしも母親が、學説といふものをのみ盾として教育するならば、子供の方が頭腦明晰の場合學識優秀の場合、その前に引目を感ずる事になりはしますまいか。頭の上らない事も出來はしますまいか。その時どこに母親としての面目がありませうか。母親としての權威が保たれませうか。考へて頂きたい事であります。

昔の母親は、學説を知りませんでした。方法の研究も致しませんでした。然も母親としての躾には訓誨には、立派な權威を持つて居つたと思ひます。それは母親がその子女に對する時、いつも自分の力だけを賴んで教育して居なかつたからであります。常に人間以上の何物かの力を感じ、それに對し敬虔の念を持ち、それにすがり、それに導かれ、そして子供に臨んでゐたからであります。そして子

供にも暗々裡にその力を認めさせ、その前に立つて恥かしくない人間である事を要求してゐました。そこに非常な力強さがあつたものであります。

即ち日常生活中に、まがりなりにも一つの信仰を持つてゐたといふ事は確であります。多少迷信的の傾向があつたとしても、母親の眞面目な瞳で見すゑられた時、子供は安心してすべての言葉に服從して居つたのであります。

そんならその信仰はどんなものであるかとお聞になるかもしれませんが、それは無論眞の宗教的のものではなかつたと思ひます。

例へば、子供が一粒の御飯をこぼしたとしますと、母親はこれを勿體ないといふ言葉で誡めます。その言葉は、單に經濟を教へるのみでなく、罰が當るから、といつて見えざるものに對する一種の恐を、もたせるものであります。

箒をまたぐとお產が重いといつて、不作法を誡めます。御飯後すぐに横になると頭に角がはえて牛になるといつてきかせます。これは實にをかしい話でありますけれど、私自身も子供の時にはそれを信じ、頭をさすつて見ながら起き上つた

事を記憶して居ります。

又姙娠中火事を見ると、生れる子供にあざが出來るといふのは、胎教上母親に感情の中正を保たしめ、突嗟の場合にも愼をおこたらせぬ樣教へたものでありませう。

昔の教育法は、次の時代の人に幸福を與へるといふ目的から、理窟を抜きにして實行を教へ、さくべき場合には不吉の事がらと結びつけてゐます。實に親切な教育の仕方だと思ひます。一般に行はれてゐる北枕を忌むといふ風習は、心身の休養に最も大切な睡眠時間を、空氣の流通の惡い、光線の這入らない樣な北の方を枕にするといふことが、衞生上有害であるから、それを避けさせたものでありませう。又現在の如く井戸水や水道のない時代、流の水を汲んで飲料とした時、その大切な水源地には、常に楊柳觀音が祀られてゐました。これは恐らく惡戯者が放尿する事を憚らせたもので、今の立札以上の權威を、そこに持つて居たものと思はれます。

又面白い事は田舍道を歩きますと、お地藏様のまはりに今でも小石が一杯つみ上げてあります。往來の小石を差上げると、お地藏様がお喜びになるといひ傳へられてゐますが、これは恐らく躓く小石を拾はせて、往來する人の爲に計る公德心を養つたものと考へられます。現在の如く、わざ〳〵道に小石を入れて道路の修繕を計つてゐる場合には、小石を道へ置いた方がお地藏様がお喜びになるかも知れません。又古くから殘されてあります一年中の儀式も、五節句のお祭も、かうした深い教育的の意味のないものは一つもありません。

此の如く昔の教育法は、今日の教育法とは全然その方法を異にして居りましたから、母親も教育程度は低くても、家庭教育研究の機關はなくても、一つの背景を以て敬虔の念を基として、信仰させ、恐怖させ、形式をとゝのへて、これを實行させ、實行によりて良い習慣を養つて、不知不識の中に人格の完成を期したものであります。

この力强い方法の中から、今日の私共は何かしらん學ばなければならぬ點があ

りはしますまいか。

然し現代の識者は、かうした方法を古くさいとか、非科學的だとかいふ言葉で一笑に附してしまはれるで御座いませう。けれど、昔の母親がとにかく一種の信仰の立場から、强い自信を持つて子女に對してゐた事は、爭ふべからざる事實であります。然して今日の教育に缺けてゐる點は、確にこの信念と、この實行であると私は信じます。思想混亂の今日、子女の指導者としての母親に、最大切なる事は、自己が正しい强い宗教的信仰を持ち、迷はずあやまらず、一の理想に向つて進む事と、子女に對しては母を通して或る力を認め、躊躇なく服從し實行する勇氣を持たしむる事との二つではなからうかと存じます。

尙一例をつけ加へますならば、子供が幼い時は桃太郎のお話を興味を以てきゝ、これを實際の様に思つてゐます。然し年が長じて後、其の話が寓話であつたと判つても、親の與へようとした善惡の批判は、はつきり頭に刻みこまれ、少しも害のないことは皆様も御承知の事でありませう。花咲爺の話を眞と思はぬ時が來て

もその話から正直の幸福をつかんで、成長してゆく事が出來ませう。つまり幼稚な形式は、成長と共に何らの害を殘さずに消えてしまひ、理論のみが正しく胸中に再現する事になります。

此の如く考へます時に、寓話による教育法は、科學と相背馳するものでなく、その根柢を作つてゆくものであると云ふ事が出來ませう。ことに童話を喜び、それによつて教育されてゆく、幼兒時代に作られた強い信念は、その子供の一生を支配するものであります。その強い信念といふものは、只今の樣な試驗勉强などによつて築き上げられるものではありません。然るに今日の子供は、否家庭は、學校萬能を信じてゐるかの樣に思はれます。普通教育の大切な卒業期にある子供などが、夕方おそく疲れた姿で歸つて來る樣子は、實に悲慘なものであります。母親はその事實によつて、大切なものが出來上ると喜んでゐる樣です。けれど學校で行はれてゐるものは主として知育であります。記憶力や理解力といふ樣なものを、數字であらはし、その數字をたしたり割つたりして成績を出します。その

成績が上級學校入學のよしあしを定めたり、職業戰線上のねうちを定めたりしますが、眞の人間の價値は、それだけできまるものではありません。數字によつて表はされるものではありません。如何なる知識技能も、確乎たる信念の上に築きあげられたものでなくては、礎のない建築物と同じであります。世の母親は優等生を作らうとあせる前に、確乎たる信念のもとに、正しい人生觀をもつ子供を、作りあげて戴きたい。すべての母親がこの自覺の上に立つ時、初めて理想の世界が實現されるものと私は信じます。

お母様へのお願（其の二）

（昭和八年三月九日放送）

第二の國民たるべき皆様方の子女は、今や物質文明に眼を眩まされて、誰も彼もが足を空にして驚異の世界を求めて居ります。さういふ子女に對しては、餘りにも今の家庭は物足りない所があります。今の家庭は異つた思想異つた感情に生きる人々が、一時的に集合してゐるかの様な有様でありまして、多くの場合母親はそれを統制する責任を回避してゐます。指導すると云ふ權威を我から擲つて居ります。今の子供は私達の手におへないといふ理由で。

實際青年期に達した子女は、肉體的に變化が起ると同時に、精神的にも動搖が起つて、やゝもすれば憂欝に陷り、つまらない事に不平が起つたり、惡いと知りながら周圍に反抗するといふ事實は、常にきく事であります。さういふ時、母親

はこれを理解し、最良の方法を考へて見ようとはしないで、はれものにでもさはる様にハラ〳〵して、まあ友達とでも遊んで來いとか、或は活動寫眞に行つて來いとか云つて、その息づまる様な場面をのがれようとする傾向があります。故に多數の子女はどこにも光明を認める事が出來ず、非常な惱をもつ事になります。彼の三原山に死處を求めた一女性は、自分が家に歸つても語るに人がない。思想も感情も相容れないからと、度々云つて居たとの事であります。或は又樂しかるべき結婚生活の第一歩を、我から捨てさる様な人もあります。事の善惡はさておき、かゝる人達は現代に於ける一種の犧牲者でありまして、實に〳〵悲慘な事柄と申さねばなりません。而も事實は之に止らず、現れざる犧牲者がどれ丈ある事でせう。之は私が一々申すまでもありません。眞に家庭の樂しさを知らないものゝ歸着する點は、多くの場合、にぎやかな町の灯を慕ひ、ネオンサインの光に憧れ、ジャズの音に身も魂もフラ〳〵となつて、出てゆくのであります。さうして放浪の間に興味をさがそうとするのであります。家庭をきらつて別居生活を要求

するのであります。その爲には、自然物質が必要になつてきます。不足すれば不平が起ります。家庭をはなれての不平話には、銘々が自分の身分と云ふ事を忘れてしまひます。利己的精神の増長による誤れる平等主義から、社會の不合理といふ事を叫び出します。話題が各個人の裏面をさがすことに興味をもつ樣になります。そこに種々の罪惡を認めて、つひには理想を遠き外國に求める心持になります。「夜目遠目傘の下」と申す言葉があります。成立を異にしてゐる外國を尊重するあまり、その思想のすべてをいゝものとして、受け入れてしまひます。自分が日本人である事を忘れ、自分の國の歴史を忘れ、自分の國語を愛せず、自國の文を綴る力を持たず、又それを以て自慢の種として、自ら世界人と稱して得々として誇つてゐます。かうして心と體とを害うてゆく人が、どれ程ありませう。實になげかはしい事であります。一例として考へられる事は、誰も〳〵西暦は確實に記憶して居ますのに、皇紀何年か覺えてゐる人が少いのです。西暦は今や宗教上の意味をはなれて、一つの便宜から數へられてゐるのであつて、日本のエトの子

だの丑だのといふものより、餘程便利にはちがひありませんが、我國の建國をあらはす意味深いものとは、非常に縁の遠いものであります。

全體人は人としての價値は等しいと言ひます。然し價値そのものゝ素質は、他と違つたものを持つて居らねばなりません。そこに一人一人の値打があります。又存在の意味があるのでせう。家風がそれ〳〵ちがふから個々の家が尊いのであるし、國にはそれ〳〵國風があるから、各國が世界に立並んで存在の意味を持つものであります。日本といふ國籍をはなれて日本人が世界のどこに生きて行かうと言ふのでせう。これは社會問題上ゆゝしき大事ではありますまいか。此の如くして滅亡しない國がどこにあるでせうか。然も振りかへつて見た時、その人達を生み育てたお母様達に、その責任がないと云はれませうか。

先日も少年救護法について提案なさいました方がありましたが、それは實に大事な事に違ひありません。寂しい家庭に、不行屈な家庭に、あらゆる犯罪が醸されます。生活にうるほひのないもの、身體的に缺陷のあるもの、それを救つてゆ

く事は、たしかに我々の忘れてはならない事であります。然し私は今少し奥にふみ込んで、その若い人達に先づよき家庭を與へ度いと願ふものであります。社會施設としてその人達を救ふ前に、先づその人達を家庭にかへしてやりたいのであります。普通一般の家庭でも、普通に發育した子女でも、やはり思想感情の阻隔について煩悶はある筈です。故に私はその根本に遡つて、新舊融和の家庭を作る方案を考へたいのであります。家を理解し家を樂しむやうに、子女を育てゝゆくこと、子女に同情し子女を樂しましむるやうに、日常生活に趣味あらしむること、そこにゆかしき家風も作り上げられ、過去より未來に渡つて繼續してゆく家といふものゝ權威も、確立するのではないでせうか。これは今日の時代に特に必要な事と考へます。然るに今のお母様方は、なぜその點に目をつけて下さらないのでせう。

然らば何を以て新舊の間を和げるか。これはとても出來ない事の様にも思はれますが、然しそれは難い事ではありません。母の懷を戀しく思つてゐる幼時

の時から、母親自身の倦まざる努力がつもりつもつて、如何なる場合にも自分の手からはなさないといふ覺悟で、絶えず見守つてゆくといふことが、その不可能と思はれることをも實行させ得ると、私は信じます。其の方法の一つとして、私はこゝに一つの提案を致します。それは新時代に處する爲、舊い日本の傳統に、すべての精神を求めてゆきたい、といふのであります。虚禮に陷つてゐるものにも、そこに新しい生命を與へてゆきたいといふのであります。

故きを溫ねて新しきを知るといひます。若い者が尖端から尖端に移るといふのは、何物かに興味を求めたいから起ることであります。我國の風俗習慣に興味を持たせる事が出來れば、その點に於て新舊一致した心境を持ち得ることになり、子女が家を樂しむ結果を生じ、延ては家庭の他の人達をも、一歩〳〵進めて行く事になると思ひます。その爲私は先づ德川時代に盛に行はれた五節句の行事を、復活させたいと願ふのであります。

德川時代約三百年の泰平を來したのは、初から一貫した方策を以て、凡てに臨

んでゐたからでありませう。己の分に安んずること、自力更生の考へを以て進んでゆく事、是等が中々よく齊つて居た様であります。一年中の行事についても、統一ある方法を以て家庭のすべてを結びつけ、一時的の思ひつきではなかつた様です。たとへその成立に、多分の迷信が含まれてゐようとも、少くともその行事によつて、その時々に家庭の凡ての人の心を一つにし、近隣の交際を圓滿にした事實は爭はれません。すべての文化のあとを見れば、何れも形式の整ふ事によつて內容が豐富になり、精神的深みをもつやうに思はれます。三千年の間に氣候風土の影響をうけて、漸次作り上げられた形式を捨てゝ、日本の精神を他の異つた形で現はさうといふのは、困難でもあり、又徒勞でもあります。遊びにしても、家庭中心の遊びの中に、眞の日本の精神を培ひ養ふならば、思想問題もこれによつて解決され得ると私は信じて疑ひません。

先づ三月三月に行はれた雛祭について例をとりますと、日本人として仰ぐ最高權威我々の尊敬の的であらせられる　雲上の御有様を我家に移し奉つて、自分達

がそれにかしづく心になりますと、そこには秩序があり、禮節があります。來客に接する作法も、幼兒の時から實習する事が出來ます。然も最後にこれを整頓してかたづけさせること、之は整理の立派な形であります。又我々の日常生活を簡易にすることは、止むを得ざる必要から起る事であつて、出來るならば家庭生活に、それ〳〵の適當なる調度を用ひたいと云ふこと。この要求はお雛様のお道具で半以上滿足が出來ませう。かうして細かく調べますれば、教材は限りなく出て參ります。既に成人したる子女は、これによつて教育しようといふ事は無論駄目でせう。然しこのうるはしき風俗、趣味ある形式によつて、幼い時から教育したならば、十分の効果があるものと私は信じます。

近年この雛祭が非常に復活されて參りましたことは、誠に結構な事でありますが、然しその精神には疑をもたずにはゐられません。自分の苦心によつて作り出された、又描き出されたお雛様、それがこの頃は、全然商賣人の手で調へられることは、時節柄據ないとしても、身分不相應な高價なものを並べ、他と競ひ

合ふようなことは、反つて我儘を養成する事になります。作る方でも亦、雲上の御日常といふ眞を忘れて、之を滑稽化するやうな傾があるのは殘念であります。

春の氣分が漲り渡る時、桃の花が紅の雲とまがふ時は、人の心の花もほころびそめます。そしてよもぎをつむとては、廣い野をかけめぐり、田螺を求める爲には、田の泥の中にもまじり、或は又潮の干潟に立つて蛤をひろひます。そしてお雛様の前にそのさま〳〵なものを供へる時は、知らず〳〵の中に自然と自分との密接な關係をおぼえます。かういふゆかしい生活ぶりは、教育資料として、話にだけでも殘しておきたいものであります。次に來るものは端午の節句であります。夏の日のかゞやかしい青空に、天にものぼれと、ふき流されるあの勇しい鯉のぼりは、實に尙武の氣象にとむ日本男子の表れであります。

そして男子は勇しく、女子はやさしく各の節句を喜びむかへたあとに、七夕の夜が來ます。物かなしい秋の夜、何とは知らぬもだえに、夜毎に眺められる星の世界、そこに神祕な結婚の話があります。性にめざめようとしてゐる人達が、向

ふ横町の人達の噂話でなく、星を對象としてその問題を教へられるとすれば、如何に嚴肅な心持でこれをきゝ取るでせう。然も結婚後の享樂が、永久の悲劇の種になるなどといふことは、實に絶好の教育資料ではありませんか。かく云ひ出せばきりがありませんが、さういふお話は又他の日を待つことに致します。

要するに昔の家庭に行はれてをりました、五節句の樣な種類を復活させて、この舊日本に殘された形式を通して、新日本の精神を十分感得せしめ理解せしめることが、家庭を統一せしむる上にも、今後の子女教育上にも大切なことゝ存じ、この點を特に切望する次第であります。

針の供養について（舊稿）

私は微力をも顧みず今日の經營難時代に獨力で學校の經營教育に當つて居ります。それは新時代の女性を教育すべき任務が自分に與へられた仕事と自覺してゐるからであります。何を信條としてゐるかといへば、勿論教育勅語の御趣旨に準據することは、申す迄もありませんが、私としては新時代に處する爲、舊い日本の傳統にすべての精神を求めてゆきたいのであります。虛禮に陷つてゐるものにも、そこに新らしい生命を與へて考へてゆきたいのであります。建國三千年、この間に作り上げられた風俗習慣は、一朝一夕にして變更せらるべきものではありません。よしや一旦は破壞されたと見えても、根强く培はれたその精神は、又新らしい力を以て我々を喚び醒してくれる筈です。

舊い日本にも學校の制度はありました。然し一般的に言へば、教育は家庭に於

て行はれたのでした。母親は嚴格と慈愛と二つながら兼ね備へた態度で、男の子を、又女の子を教育してゆきました。一年中の何かの機會を捉へては、自然物や何かを利用して、知らず識らずの中に、德性を涵養することを務めました。それで舊日本に殘された色々の儀式は、種々な形式のもとに深い內容を持つて居ります。全體、外國ではすべて結果を尊ぶ樣です。一年中を淸算し　。その結果サンタクロースの手から賞品を授與されます。然しその見方は割合に雜駁になりはしますまいか。我國ではこれに反し、年の始に年玉を與へます。これはその一年間を祝福すると共に、よい子になれとの希望をあらはすものでありませう。一つの行爲については先づ動機を研究します。原因の正しさを要求します。故に或結果が表はれた時、すべてに向つて細かい注意が拂はれます。大きな仕事には、隱れたる小さな犧牲が數多くあり、その力によつてはじめて、凡てが成し遂げられると考へます。その場合當然その犧牲者が、感謝の的になるわけであります。その例として針の供養を擧げることが出來ます。

裁縫が女子の仕事の全部であつた時代――女子を評價するに、裁縫の巧拙を基準とした時代に、多くの人々は立派な仕立物の出來上つたその力の中に、然も最必要な針のあることを忘れませんでした。その爲に折られたもの、曲げられたものに感謝の意をいたし、これを祭らなければ氣がすまなかつたものであります。これは實に尊い精神だと思ひます。今日の樣に女子の仕事が增加したとしても、人間生活の三要素として衣といふものが數へられる限り、針に對する女子の感謝の念は當然持ち續くべきものと思ひます。二月八日の事始の日に、折針を集めて淡島神社に納めたといふこと、淡島神社の祭神が俗に婆利才女だと稱せられてゐるから、婆利を針に通はせたといふことは本當でせう。然しその針といふものを認め、それに感謝する心は淡島樣がなければ、又何か他の形式であらはされるでせう。この氣持は實に大切だと思ひますから、私は生徒に命じて、この二月八日迄に各家庭の折針を集め、學校に持つて來させる樣にしました。針の益も大きいのですが、不始末から大怪我をする場合も中々多いので、一つには感謝の念、一

つには小さいものゝ始末をよくすること、この二つを一層痛切に感ぜしめたいと思ひ、この機會に生徒を一堂に集め、さゝやかな祭壇を設け、心ばかりの茶菓を並べ、嬉戯させたいと思ふのであります。

私の學校では理想を高遠に求めて、實行を卑近にとる人々を生み出すつもりで居ります。高遠の理想は必要ですが、それのみですと、時に自分の至らぬことを忘れて、徒らに親を批評するといふ結果にも立至ります。それで實際問題の機會を捉へては、親の知つてゐること、行つてゐることにつきその精神を說明し、新らしき生命を附與し、喜んで實行させることにしますと、家庭は學校と步調を合せてゆく事が出來、眞の敎育の効果があると信じます。現に彼岸の頃、私が外出の途上、生徒の親などに遇ひますと、學校で彼岸のお話を伺つたからといつて、彼岸詣を子供の方から催促するので、自分達の方が却つて「牛に牽かれて善光寺詣」といふ格で誠に嬉しいとしみ〴〵感謝されます。現實に卽した、然も明日を約束し得る人は、かやうにして作り上げられる筈と思ひます。年に一度や二度の

父兄會、母姉會よりも、かういふことの方がよほど連絡もとれて德育上有効であると私は信ずるものであります。

七夕祭について

（昭和八年八月二十六日放送）

初秋の夕べ空を仰ぎますと、東北の空から西南へかけて流れてゐる、天の川を見ることが出來ます。それこそ宇宙第一の大河で、ヂッと見てゐますと、滔々たるその水音まで聞かれるかの感じがあります。そのほとりに住んでゐる星は、それこそ數へきれない程でありますが、その中でも一番目につくのは、牛を牽いてゐるといふ牽牛星と、その對岸に機織臺に腰をかけてゐる織女星とであります。この織女星は、天帝の愛娘でありますが、非常に立派な織物を織上げ、或は紅の雲或は金の雲、時には紺碧の帳、時には七色の階段などを作つて、朝に夕べに父君をお慰めしてゐました。天帝もこの大事な娘に、最も立派な配偶者をと求めてをられましたが、河向の牽牛星が斷然群星を從へてゐるあの雄々しい姿をよみさ

れて、三國一の婿がねとお定めになりました。かくてこの二つの星は、永久に幸福な生活を營まるべきでありましたのに、遂に悲劇の主人公となり、今に至るまで人々の涙をしぼらせることになりました。それは何が原因であつたかと申すと、今で申せば結婚の夢に醉ひ、あまりに享樂氣分になりすぎた結果、すつかり自分の職分を忘れ、機織の仕事をやめてしまつて、大變な怠けものになつてしまつたからでありました。そこで天帝は非常に御立腹になつて織女星を呼びかへされました。然しそのまゝに放つておく事も、あまりに可愛想と思召され、一年にたつた一度、七月七日の夜には、天の川を渡つて相會することを許されました。それは親の横暴であるなどゝその當時の人は憤慨しませんでした。天から與へられた自分の職分を怠るといふことは、非常に恥づべきことである。どんな極刑に處せられても、やむを得ないものと信じられたものでありませう。

この傳說が日本に傳はつたのは、隨分古いことで、一年一度相逢ふといふことが、早くから詩歌の好題目となり、萬葉集の中にも牽牛と織女との氣持を——一

年に一度の逢瀨を待つ苦しみと喜とを、織こんだ歌が百首以上も掲げられてあります。又この夜に雨が降ると、天の川の水層がまして、迎の舟を出すことが出來ないといふので、それに關する恨なげき、又鵲が橋となりて七夕つ女を渡してくれるといふことについての喜と感謝とを詠んだものであります。それから古今、後撰と時がたちましても、この二つの星の心持に同情したものが多いので、後世の土用干のもとゝなつたと、いはれてをります着物をかけたといふことに關する歌「織女にぬぎてかしつる唐衣」といふ風なものは至つて少く、まして自分達の願をかけるといふ所謂乞巧奠に關した歌は、鎌倉幕府の終頃出來た玉葉集といふ歌集にはじめて見えてゐる位であります。然もその歌は「庭の面にひかで手むくる琴の音を雲居にかはす軒の松風」といふ風な歌でありますから、あまり切な願でもなさ相であります。その點白樂天の竹竿頭上願糸多といふ言葉と思ひくらべて、國民性のあらはれを見ることが出來ませうか、但かうして勅撰集にのせられてゐる作者は、その當時のお公家さん達で、戀愛を措いては實生活の問

題は、あまり念頭になかつたものかも知れませんが、然し貴族社會が文化の中心となつてゐたことを考へれば、一般國民の思想も大體そんなものであつたかと思ふのであります。處が德川時代になると、この機女に機織、裁縫、習字、音樂等手藝の上達を祈ることが行はれ、祭の形式も主に女性のねがひ祈りといふことが多くなつて、文字通の乞巧奠になつた樣であります。

この祭は支那の晉唐時代から起つたもので、我國に傳はつたのは奈良朝の時代であるといはれてゐます。孝謙天皇の天平勝寶七年七月七日に、はじめて乞巧奠を設けられたと、風俗志に見えてゐますが、平安朝の時代になりましては、清涼殿のお庭に荒菰をしき、その上に高机四脚をおき、種々の供物をならべることが宮中行事の一つとなつてゐたといふことであります。その後時代によつて儀式に異同はありましたが、德川時代には五節句の一と定められ、諸侯が出仕し祝儀を述べ、大奥でも盛大に星祭が行はれたとのことであります。かういふ形式を作つた政治家の眞意は、よく判りませんが、恐らく荒々しい氣風を和げる一方法とされたのではありますまいか。民間でも貧富貴賤の別なく、戸互に必ず青竹を立て五色の糸を五つの縫針に通し、五色の紙を色紙短冊形に切つて、色々の願望の歌を書き記し、香爐、燈明、花瓶、神酒、琴笛、新しい果物などを供へ、この悲劇の主――しかも相思の中を隔てられ、あらゆる苦惱を偲び、多分に人情の機微を察し得ると思はれる織姫に、手藝の上達といふ女心のやさしい願を、きゝ屆けてもらはうといふ心持をあらはしたものでありました。女性の理想が變つて來ると、祭の形式も變化した樣でありますが、大略今申述べました樣なものでありました。

明治以後節句といふ形式は取りさられましたが、趣味の上から實に麗しいもので、桃の節句、菖蒲の祭と共に殘しておきたいものだと存じます。明日は太陰曆上本當の七夕でありますから、皆樣も空を仰いでこの二つの星の一年一度の會合を祝福して戴きたいと存じます。

扨私が皆樣にお聞になつて戴きたいと考へますことは、この星合の空によつて

人生中最大切な性の教育が出來はしないかといふことであります。又恐らくこの傳說はさういふ氣持を多分にもつて生れたものではなかつたかと申すことであります。まづ第一に七月七日といふ日について考へて見たいと存じます。

春の芽ばえは夏に發達し、秋に至つて成熟します。自然界のすべてが皆この階段を經てゐます。女學生に就て見ても、夏休を終へた時、その人々の肉體的發達の著しさには、本當に驚かされますが、恐らく男子の學生も同じことゝ思はれます。否男女を問はず老幼を論ぜず、すべての人は、知らず〳〵の中に、この自然界の原則に左右されてゐると思はれます。これはたゞに身體のみにいふべきことではありません。何とはなしのあこがれに夜の空を見上げる樣な要求が、この時に起つて參ります。一方季節から申しましても、最も天體と親しみ易い時、そして又農家あたりでは、この時早苗をかりとり、春夏の多忙だつた苦しかつた仕事がやう〳〵報いられるやうになります。かういふ時には心に餘裕が起り、性の要求といふことが起りがちなものであります。しかも成熟した男女が緣臺などに

腰かけてゐるとしたら、その間に出て來る話は、どんな種類のものでせうか。隣近所の噂話は必ず彼氏と彼女との關係といふ樣なものに落ちてしまふで御座いませう。さういふ人と人との間の話は、多くの場合肉慾問題と化し易いものであります。丁度この時、天は高く氣はすみ渡つて、夜の空には天の川が一番はつきりと現れます。そして多くの星の中、鷲座に輝いてゐる牽牛星は、特別にその頭角を顯し、諸星を統率し、これに命令してゐる樣に見えます。何といふ男性的の姿で御座いませう。空のすべでを探し求めた時、理想の男子を、そこに初めて見出す樣な氣が致します。一方琴座につゝましく座つてゐる織女星、その織姫は一年中、機織臺に腰をかけ、天空七彩の錦を織つてをります。夜となく晝となく、千變萬化するその色合、昔の女性があやかり度いと思つた心持は、恐らくこゝにあつたので御座いませう。それでこの星を理想の女性と考へることも尤な事であります。この理想の男性とこの理想の女性とを、天の川の兩岸に見出した時、當然そこに起るべきものは、兩者の結合であります。所謂性の問題であります。

元來この性の教育といふものは非常に大切なものでありますが、然し同時に最取扱ひにくい問題であります。直接問題として、人と人との心の結合、肉の結合といふものにふれることは、實に危險なことであります。それかといつて本によつてその知識を知らしめるといふことも、害の方が多いと思はれます。一般的の事だからといつて、ラヂオで放送するわけにもゆきません。學校で非常に考を練つて組織的に學問的に教へても、多くの場合家庭の誤解で、ぶちこはされてしまひます。しかも性問題ほど人生にとつて大切なものはなく、人種の別を問はず、人の貴賤貧富を別たず、賢きものも、白痴も、この性能のみは同じ様に與へられてゐるといふところに非常な神秘があります。實に美しき尊き極致ではありませんか。この神秘的なもの、謎の世界を、天體によつて教へるといふ事は、最も正しいやり方だと私は信じます。花に譬へ蝶になぞらへて教へるといふことは、一つの方法でもありませうが、もつと〳〵清らかな天體によつてその問題を教へることが最もいゝ事と私は思ひます。

男性と女性とが、相對的の存在である事、互に長所をもち、又短所をもつてゐるこの兩者が結合された時、そこにはじめて全き人格が出來上るのだといふことそれは嚴に一人と一人との關係でなければならない事、次に本當に自分を守り得た人、眞面目に生きてゐる人同志の結合でなければならない事、これは知識の度合とか、學問經歷などゝいふ事ではないので、十人が十人まで自分の心掛一つで近づき得らるゝ境地である事を教へたいと思ひます。それについてすべての人が結婚といふものゝ嚴肅さを教へられます。遊戯氣分の結合は各の勤をも怠る事になるといふことを教へられます。それから一年中思ひつゞけてゐて、然もその一度の逢瀬を迎へるといふ事ほどの眞劍さが、他に考へられませうか。この教育法は、金殿玉樓に住むものにも、茅屋に暮す者にも必要な事でありますから、同時に誰もが眺め得られる天體の問題を捕へる事が最良の法と存じます。

互に戀ふる心でも、逢ひ得ぬ悲しみでも、人間の中の事でありませんから、下品な氣持、ふざけた想像などし様はないのであります。この教育法は、必しも青

春期を待つ必要はありません。子供の時には飾りつけたものゝうるはしさが目につくのでありませう。話をきゝたがる頃になつたら、あの星、この星といひきかせてやるその話の中に、おのづからきかせたいものを會得さす事が出來ませう。然も一家團欒の中に、天體に關する興味ある談話をかはすならば、漸次科學的の眼を開くことも出來ませう。

次に乞巧奠についても、女性の仕事が機織であつた時から、裁縫を重大視した時に移り、次に音樂とか、文字とかゞ女のたしなみと考へられるに至るまで、すべて上手になりたいと思ふ心を、願の絲にことよせたといふ風に考へて見ますと、それ以外お金持になりたいといふ樣な願をした人は、昔からない樣でありますから、性問題以外にも、自分の職分に眞劍になるといふ態度を、こゝに敎へる事が出來ると思ひます。今日の世に於て最も憂ふべき事は、すべての場合に眞劍味を持たないことであります。それが最も露骨に表はれてゐるのは、性の關係であります。我々人間は男女とも、心の上に於ては、意志感情すべて、對者には十分に

想像し得られないものを持つてゐるのであります。互が謎であるのであります。其謎であるところに、愛もわき敬も持てるのであります。然らば肉體に於ても亦、この謎が必要でありませう。今日一般に唱へられてゐる性敎育といふものゝ大半は、互の肉體を一つの機能として生物學的に說明しようといふことであります。私はそれに對してはあへて不贊成の意を表するものであります。それが遊戲氣分であつても、又學理上からであつても、只今の有樣では、肉體の上に漸次神祕的の部分を失つてゆきます。女子は羞恥心をなくし、男子は女子の肉體露出を歡迎します。かうして互にあこがれを失ひ、喜を失ひ、麻痺して行つたら、遠からず獸類に墮落してしまひはしないかと私は心配いたします。

私はこの七夕を迎へるに當つて、殊にその思を深くし、世の識者に訴へたいと思ふものであります。甚だ不十分ながら、私の考のあるところを御承知下さつて一つの敎育問題として研究していたゞきたいとお願する次第であります。

こんな娘さんならお嫁さんに世話したい

（昭和七年五月）

これは或雜誌社で、意見を募つたものでありますから、おきゝおぼえの方もあると思ひます。依頼されて書いたところが、先方の氣に入らなかつたらしいです。そこに世相が見えると思ひますので、わざとそのまゝの表題で、この文をかゝげます。

「こんな娘さんならお嫁さんに世話したい」さういふ娘さんを見たことがあるかと聞かれる。これは中々返事にこまる。あの令嬢この令嬢と數へあげて見ても、やはり何かしらあきたらぬ處がある。これは誰も同感だと思ふ。

然しこれは出發點が惡いのではなからうか。一歩退いて出なほして見る必要があるのではあるまいか。理想のお嫁さんといふものを銘々が作りあげて、その標準に嚴密にあはせようと思ふ時、さういふ人は存在しないといふ嘆を發する。そ

のくせ自分の娘に對しては相當寛容であるからこそ臆面もなく「どうぞお世話を願ひます」と敢へていふ事が出來るのであらう。それではあまり勝手すぎる。

もう一つかういふこともある。現代の若いものは聰明さを多分に持つてゐて、時に臨んでの機智を働かせる事が出來る。例へば自動車に乘らうと思つた時、生憎人數の關係から一寸躊躇する樣な場合、洋裝の娘が一寸スカートのはしを執ると「失禮」と運轉手の助手席にすわる。それですべてが解決されて、「どうぞお先へ」の一言位云つてゐると思ふ間に、皆が箱にをさまつてしまふ。こんな時、もしこの娘が日本髷だつたら長袖だつたら、そしてさういふ態度をしたとしたら、何といふ蓮つ葉だらうと、冷笑の眼を以て見られるのではあるまいか。お嫁入ざかりといはれる娘さんは大體、昨日洋服をぬいだばかりといふ人である。反身になつて歩いてゐるとか、他人の横をかけぬけたとかいつて、小生意氣だと人が謗つてゐる、などゝいふことを考へる餘地なしに、斷然今までの習慣を出してしまふ。新舊作法の間に狹まつて、當惑してゐる娘を捕へて、「ナッテキナイ」と評す

るのは、實に殘酷だと思ふ。もつと同情を以て、理解ある目を以て見るべきであらう。

但しこれを以て、私が無作法を許容するものと見られては困る。或る婚約の令孃が、その友達と一緒にその婚家を訪ねた。先方には生憎、愛に盲目になつてゐる筈の息子がゐないで、その父親が應對した。處でその令孃は、さつと袂をひるがへすと、座布團の上をッカ〳〵と踏んで通つた。友達は一寸それを片よせて歩いたといふ話がある。その結果はどうなつたのか、考へる事が出來るだらう。又私が實際目擊したことだが、九州に旅行の途中、知名の實業家と乘り合せて、大阪宮島間の汽車の二等室にゐた時、丁度氣候のいゝ時であつた爲か、新婚旅行の三組ばかりが乘つてゐた。非常に混んでゐて席がない爲、その實業家は自分のトランクの上に腰を下してゐたのだが、すぐ側で新妻がその夫に膝枕をさせ長々とねかして、髪を撫でつけたり顔をふいてやつたり、毛布の位置をなほしてやつたりしてゐる。それを見て「あれは夫に對する犧牲のあらはれだ」とその實業家が

評したから、私はそれに抗議した。「あれは犧牲ではない愛情の奴隷だ。あれほど無作法千萬の事をしてゐながらそれに氣がつかず、盲目愛の奴隷になつてゐるのだ」といつた。本當に犧牲的精神があるなら、まづ夫の名譽を重んずべき筈である。夫の身體をかばふ前に、夫の名譽をかばふべきである。起きてもらつて席を讓つたからといつて、不貞よばゝりをされる譯もあるまい。

由來現今の娘には、この犧牲的精神が不足してゐると思ふ。自己の存在をあまりに意識しすぎ强調する傾があると思ふ。人に親切を盡すにも、自己滿足を主にする。故に顯はれたる處では、所謂サービスを中々立派にやるけれど、知つてもらはなければ承知が出來ない。默つて庭の紙屑を拾ふ事は、勞力の浪費と考へる。私の學校に何かの行事の前には、必ず夜分に來て便所の掃除をする生徒があるが、これは隱れた仕事の尊さを、本當に敎へられた純眞な態度であるが、普通の人にはとても出來ないであらう。婚約の娘などは、馬を射よとの策略で、先方の老人や子供を大事にしたらばよさそうなものだけれど、中々それをしようとし

ないで、直接行動を開始することを好む。妻として夫に對する時、ことにそれが目立つ。貞操は夫に盡すこと、夫に盡すにはその意を迎へることゝいふ信條で、夫の爲にかたちづくる、夫の好む化粧をする、夫の喜ぶ服裝をつけ手を携へて歩く。何か悲しい苦しいことがあると、涙潸然として芝居がゝりに訴へる。都會的騷音の中に麻痺してしまつて、強い刺激を追ひ變化を求め、そして積極的といふのはかういふものと考へてゐる。

精神的に物質的に、どんなに苦勞しても夫には知らすまいと、胸につゝんでゐた昔の女の話をすると、それは舊式だといふ。舅姑の無理をヂッとこらへて、笑顔をくづさなかつたといへば、それは虚僞だといふ、夜がふけてから水ごりをとつて、病氣の平癒を祈つたといへば、衞生の心得のない馬鹿だといふ。そつと裏口から包をかゝへて質屋の軒をくぐつたといへば、夫婦の間に秘密を作るのは罪惡だといふ。あけつぱなしは朗らかかもしれないけれど、奥行のない生活は、實に安つぽい生活だ。世の中のあらゆるつらさに忍從し、これに堪へ得る强い力

を持つてゐる時、そして種あかしをしない、不思議な謎の樣な中に家族のすべてを抱擁してゐる時、勝利の榮冠はその人の頭に輝くであらう。それが本當の犧牲の生活だ。汽車はレールの上を走る。レールが一番大切だといふ。然しその下の枕木——默つて土中に埋まつてゐる枕木が、猶一層立派な役目を果してゐるのではあるまいか。家庭といふ車をまはしてゐるのは、立派に裝置された機械であらう。けれどその機械も原動力がなければ徒なる飾にすぎない。女が家庭の潛在力となる時、はじめて內助の功があるといふのだ。

次に私は美貌について考へたい。女の身のたしなみとして、自然を生かし得た時、私は本當に美しいと感ずる。讀書が美貌を生ずるとある新聞に書いてあつたが、私はそれに同感する。內容の充實が外に表はれた時、そこに目のかゞやき口のしまりがある。同時に氣立のやさしさは、こぼるゝばかりの愛嬌となつて表はれる。つゝましやかな胸に、一杯の感情をたゝんでゐる時、一寸した刺激を與へられると、思はず知らず顏を赤らめるあの紅潮の麗しさ。あの羞恥の心は、永遠

に女性のみの持つ誇でなければならない。私は全人格のあらはれとして、人の顔貌を見た時そこに美人を見る。

あらゆる習慣は形となつて表はれ、あらゆる生活はその人の骨骼のどこかに特殊なものを作りあげる。溫泉場で赤裸になつた時、人は一切平等だといふけれども、その人の教養習慣職業は、そこに他と違つたものを表はす。行き屆いた家庭教育のあらはれは、ゆかしさとなつて上品さとなつて、思はず見つめさせる魅力を持つものである。

私は多くを要求しないつもりではあるが、昔の女にも今の女にもかけてゐると思ひながら、切に希望してやまないものがある。謠曲草子洗小町、これは架空談であらうけれども、そして小町が果してさういふ性格であつたかといふことも無論わからないけれども——その小町には非常なうるはしさがある。寃罪に身も世もあらぬまでに歎いてゐる間にも「この草子を取りあげ見れば行の次第もしどろにて文字の墨つきたがひたり」と、靜にその原因を究むる立派さがある。逆上で

もしてしまひさうに考へられる時、感情の中正を保ち得て、判斷をあやまらぬといふのは、實に得難いことだ。次に黒主の罪が暴露されようとする時に、「此身皆以て其名ひとりに殘るならば何かは和歌の友ならん道をたしなむ志誰もかうこそあるべけれ」と、その罪をかばふ氣持、悔悟した時の苦しさを我身に引うけて、自分の力でその苦しみを取除きたいと苦しむ心、これは寛恕といふ語位ではいひ盡し得られぬうるはしさである。

最後に私は生活戰線に立ち得る力を、女にも要求したい。對等條約を結ぶには國力の充實を要する。結婚を强ひられた時これを斷れないのが今の女子だといふことは、甚しき恥辱である。選擇の自由を持ち、對等の結婚をなす爲には、職業上、經濟上の自信力を要する。佛法女房鐵砲の三寶が男子に必要ならば、女子にも亦信念とよき夫と自活力とが必要である。生產能力を男子にのみ要求し、消費氣分で暮してゐる妻は、家を齊へ家を興して行く事は出來ない。リヽャンで電燈カバーを作つたり、ビーズで手さげをこしらへたりして、大いに生產能力を發揮

したつもりの人もあるけれど、これはなくてもいゝものを、時間を消費し勞力を消費して作るのであるから、變形の消費であつて斷じて生産ではあり得ない。それよりも衣食住の上に興味を持つて、料理にも裁縫にも整理整頓にも、頭腦を働かせ、自分の力が直接に又間接に、生活を助成してゆくといふ喜を持つならば、それは消極的の生産といひ得る筈である。ことに農家の婦女が農業の意義と尊嚴とを知り、自覺して田畝の間に勞働する時、農村の衰微は漸次緩和されてゆくことであらう。商家の妻が正しい商業意識を以て顧客に臨む時、必ずやその家は繁昌するであらう。夫が病みたる時失業したる時、一家をさゝへてゆくのは妻の任務である。不幸夫に先だゝれ、姑と子女とを扶養するのは、又其の任務である。これだけの覺悟がなくては、結婚は出來ない筈である。但し徒に他の好奇心を滿足せしめ、それによつて金錢を得る事は、この中に數ふべきものではない。所謂職業婦人の稱呼の濫用は實に慨嘆の極である。

「理想のお嫁さん」といふ言葉は、もつと〳〵色々の要素をならべる必要があ

だらう。然し以上述べた點は「お嫁さん」に對する當然の要求であり、又努力すれば誰にも達し得る境地であると信ずる。

姑と嫁

むづかしい字は姑とよむといふ話、それはよめにくいの謎だとか。カラシは辛いもの姑はこはいもの。何といふ言葉が出來たものでせう。よく〳〵深い縁があればこそ、赤の他人が母と呼び嫁とよぶことになつたものを、爭ふべきもの憎むべきものと、全體いつの世から定められたことやら。先お嫁にゆくといふ時、お姑さんはといふ。ありませんといはれると、胸をなでおろす。これは、先方の人は早死しますよと、いはれたと同じことだのに、さうは考へない。至極おめでたい話です。家庭悲劇といふと、極つてこの關係が原因といはれてゐたものですが、世の中は移るといふ如く、この頃は、さしむかひの場合の方に、却つて色々の問題が起るといふことです。倦怠期とかいふ言葉が、新しく流行して見たり、互の貞操問題が、三角四角といふ樣な、幾何學的事件を釀し出したり、老人連に

は説明しても解らないことが、多くなつて來ました。かうなつて來ると、又新に姑の價値が認められて來ることでせうと思ひます。「憎い〳〵といふ姑は、主を生んだる母じやもの」この場合、私は別な立場から、姑禮讃をしたいと思ひます。

大量生産は安直にゆきますが、趣味性のあらはれを求むることは出來ません。國にそれ〴〵國風があり、家に別々な家風があります。一寸見た處では間違ひさうな長屋住居でも、一歩格子をあけて玄關を訪れゝば、それ〴〵特殊な生活が、下駄の並べ方にも傘のおき方にも、表れる筈であります。つまり人に個性が確立してゐるものならば、家には家の個性がかゞやいてゐる筈です。處がその家風といふものが、全體誰によつて繼承されてゆくものか。家名はそして家系は、多くの場合父より子に傳へられます。然し家によつて違つてゐる精神的訓練は、必しもこの場合授受し得られないのであります。これは大きな問題であります。もし結婚といふものが、祖先をも子孫をも考慮に入れないですむものであるならば、當事者兩人の間で、勝手にすればいゝ譯でありますし、又結婚後の生活も、どん

な無責任なことでも濟んでゆくかも知れません。然しさう行かないのは、家といふ過去より未來に渉る、大きな存在の爲でありませう。して見れば、精神的訓練を授けるものと受けるものとがゐない事は、家にとつての最大不幸であります。我國に於ては、これが姑から嫁にと漸次傳へられたものでありました。無論有名無實のものもあつたでせうけれど、もしこの必要がないならば、妻は必しも夫の家に入らないでも、いゝかも知れません。私の郷里などでは、姑ざりといふ語があつて、嫁が氣に入らない時は、姑は夫の留守中それを離緣することも出來たものです。これは非常な弊害には違ありませんが、その事の起つた精神には、立派なものが存在してゐる筈であります。つまり嫁はその家の主婦として、姑より家の精神を繼承すべき當事者であります。かくして家の存在する限、この美風が傳へられねばならないのであります。無論私は理想を述べてゐるので、今日それだけの姑があるか、それだけの家があるかといはれるかも知れません。然し私は躊躇なしにいひます。それが本當なのです。さうでなければいけないのです。立

派な國は立派な家を單位にして、初めて出來るものです。米の女傑ヴキラードといふ人は、國家を立派にする爲には、その單位である家庭を正しくしなければならない、といふので、家庭純化の爲に努力され、幾百萬の家庭に幸福を持來らせたといひます。個人主義といはれる米國に於てさへ、この通であります。まして我國に於ては、個々の家庭のかゞやきが、大日本帝國のかゞやきとなるものであります。我々は決してこの事實をゆるかせにすることは出來ないのであります。

若い嫁が姑の一言一行に泣いて、それを姑の無理解と解釋する。二十年の後三十年の後、その嫁が姑になつて、姑と同じ樣な言葉づかひ同じ樣な起居動作になつてゐます。私は所々でそれを見てゐます。これは偶然ではありません。又わざとしてゐるのではありません。似たもの夫婦とは、多くの場合妻が夫に同化するのをいふのであります。然して嫁はそれと同じ筆法で、姑と同化するのであります。嫁は姑によつて、夫の好惡を敎へられると共に、祖先のことを知り、墳墓のありかを知り、親戚關係を知り、家庭行事を知り、然して第二第三の姑となるの

であります。昔の妻は生涯生家の姓を名乗つて生家の紋を身につけてゐたのでありました。然るに事實に於ては、かくの如く婚家の者となりきつて、又その墳墓に葬らるゝ運命を自認してゐました。今日は結婚によつて生家との縁は斷たれ、直に改姓してゐるではありませんか。それが有名無實であつては、無責任も甚しいものといはねばなりません。序ながら今日普通に聞く處によれば、この姑と嫁との關係は、大體に於て昔と顚倒してゐるとのことであります。姑は嫁の爲に泣かされてゐます。それは嫁の方が學問があるからだときいては、驚かざるを得ません。全體その嫁はどんな學問を何年したのでありますか。本をよめば學問したつもりでゐて、それが鼻にかゝる樣な人ならば、本などよませなかつた方がかへつて人として尊いものになれたでありませう。（九月十七日）

職業の尊重

人はその長所によつて職業を選擇します。その仕事に全精神を打込んでする場合、どんな職業にも高下貴賤の別のあるべきものではありません。冷靜に公平に自己を見つめて、最適當と信ずるものに勇敢に進むことが、最正しい道であります。この場合考へなければならないのは、職業は生活の爲に求めるかどうかといふことであります。若し生活の必要上職を求めるといふならば、世襲財産を有するものは、徒食していゝ譯であります。そして、この世の中にさういふ連中が中々多い。恐らくその人は、それを當然と考へてゐるのでありませう。然し假に人が餘裕のあるに任せて、したいだけの事をし、世間に對し何ら働きかけないならば、その人は何の爲に生を受けたのか譯がわかりません。且又さういふ人は、人の世話にはなつてゐないから、人に盡す必要もないと考へるなら、大變なあや

まりで、一人が一日生活する爲には、何百かの人が勞力を捧げてゐるのであります。それには報酬があるといふかも知れません。然し人の親切は、金錢に見積る譯にはゆかないものであります。商店に行つて買物をすると、普通商人がお禮をいふ。或地方では買手が有難うといふ。これはそれ〳〵一つの習慣ですけれども實は双方からいふべきもので、その一つの賣買によつて、双方が利益を感ずるものだといふ根本問題は、忘れてはなりません。さうして見れば、お互は皆他人の庇護によつて、その日〳〵を安穩に送つてゐるのであります。何とか自分も、人の爲に盡さなければならない。これが職業を有つ第一義であります。

私が最不思議に思ふのは、職業の世襲といふことが、あまり考へられてゐないことであります。昔の職業は、親が子に傳へるのが本體でありました。不肖の子の場合、やむを得ず、その職業の上に、後繼者を求めたものでありました。かういふ立派な習慣があるのに、なぜ今日それを認めないのでせうか。これはやはり一種の破壞病から起つた弊風で、昔風は惡いことだときめる。一も二もなく、親の職は襲ぐものでないとしてしまつた結果でありませう。然し本當に冷靜に考へて見た時、子はその素質の上からも、且環境の感化の點からも、親の職を受つぐのが最適當な筈であります。農家はその田を、商家はその店を、醫師はその設備を、そのまゝ讓ることが、經濟的にも最適當であります。偶々不肖の子ならずとも、他に特別天稟ある場合には、必しも固守する必要はないでありませうけれど。

要するに、長子はその家名をつぎ家系をつぎ、然して家の職業を繼承するのを本則とするものと、私は信じます。その他の子に至つては、大體に於て親の職を己が職とすることが、あらゆる點に都合のよいわけであります。英國あたりでは代々小學教員を勤めてゐる人もあるといふ。さうすれば親よりは子の方が、子より孫の方が、立派にその職責を盡し得るに違ない。かの獨逸のサーカス團も亦、一代ではあれだけの成功をすることは出來ないといふことです。それだのに、な

ぜ我々のみは、その習慣を從順に肯定することが、出來ないのであらうか。私はこれを破壞病といひました。處で今一つの原因は、人々が各々自分の職業に眞劍にならない結果だともいへます。一度は職業の世襲を古くさいと嘲つて見たとしても、既に自分が或職について、それを一生の職業とする決心を持つたならば、必ずやその後繼者を必要とする處まで進むでありませう。然るに、生活の爲に方便として勤めてゐるといふことになれば、本當の研究もしないし、興味ももてないし、小金がたまつたらやめようとか、いゝ仕事が見つかつたら足を洗はうとかばかり考へてゐます。だから、勢、惡い所ばかり目につく。孫子の末までこの仕事はさせまいと考へる。それでは子が親の後をついでゆかうと思ふ筈がありません。これは單に職業問題といはず、人として不眞面目な生活だと私は思ひます。

自然に惠まれたる日本には、瑞穗の國の名のもとに、古來農業といふ立派な職業がありました。百姓といふ言葉は、あの支那の所產であるけれども、それはつ

まり全國民といふ語であります、その全國民といふ語が、農業を營む人に與へられてゐることによつて、我々は農業の尊さを意識したいのであります。しかも我國に於ては、それをおほみたからと仰せられてゐたのであります。田地持であらうと小作であらうと、その人達の日常は、本當の生產であります。一坪に六本の茄子を植ると、一本に平均廿五はなり、平均して二十錢位のねうちになります。これは生產額であつて融通ではありません。眼前に物を作りあげる喜の爲には、朝夕の苦しみも忘れられるのが本當でありませう。御客でもあつたらば、畑のまくは瓜でも御馳走しようといふ處に、好意があるのに、畑には草がはえてゐて、家の人が自轉車で町までアイスクリームを買ひにゆく。畑には出たがらない。人糞は扱ひたくない。土地の借手はないだらうかと、毎日そればかり考へてゐる。家にゐる時は羽織を着て懷手をしてゐる。こんな人達が段々ふえてゆくのは悲しむべき事實であります。二十年ほど前の東京近郊の百姓は、朝未明に大根、蕪等を車につんで、急坂をこえて市場に運び、歸りにはその車にこやしをつんで來

る。毎日の仕事に少しも無駄がない。生活の必需品は殆手許にある。それで農家としての純朴さを持ちつゞけ、豐なのんびりした世渡りをしてゐたものでありました。それがどうしてこの頃の樣に變つたものでありませう。

嘗て中國の或青年が勉强の爲に上京しました。家は農家で早く兩親を失ひ、祖父の手で生長し、中學を卒業しました。これでもう學問はいゝ、實地の働をさせると、祖父がいふのに、先生方が奔走して、優等生だから學問をつゞけさせる樣にと勸め、到頭農業大學に入ることゝなりました。息子も祖父の意をうけて、羊を飼ふ研究をし、卒業を待かねて歸鄉、大にその職務を勵んでゐました。妻帶といふ場合、前々よりの關係上、農村に理解のある嫁をと賴まれたので、隨分探し求めてこれならばと思ふのを世話しました。處が半年たゝぬ中に嫁がその生活を厭ひ出して、上京してしまふ。息子が迎に來ても三月も歸らない。こんなことが度重なつたあげく、息子は東京に居すわりになり、月々二百圓の爲送を受け、六十圓位の月給で、東京で仕事をしてゐます。この女性のわからずやはさたの限

でありますが、息子としても、實に農といふものを侮辱したもので、その意義と尊嚴とを知らないから起ることであります。

今でも職人などには、所謂名人氣質といふ風なものがあります。金錢の爲に仕事をしてゐるのではない。世の流行に迎合して、報酬の額によつて働くといふのは、大なる恥辱であると考へるのであります。ラヂオがはじめて出來た頃、放送された話であるが、上野公園の美術院建築の時、入札で表玄關の二つの圓柱を請負つた左官屋がありました。毎日〳〵努力しても、中々思ふ樣にゆかない。期日には遲れるし費用は思の外かゝるしして、漸うこれならばといふのを仕上げて引渡したが、本當に見てくれる人がなかつたと見え、あまりほめてももらへませんでした。處で左官は、その翌日細君を連れて來て、その圓柱をさすりながら頻りに喜んでゐる。本當に生命をかけて仕事した、そのあとを見あげながら、會心の笑を洩してゐる。細君は損の事ばかり考へてゐると見え、あまり喜んでもゐない

のですが、半被姿でいかにも職人らしいその様子は、開館式前とて氣せはしく右往左往してゐる係の人達の姿にもまぎれず、あまりの涙ぐましい光景に、誰も誰も感じ入つたといふ事であります。全體機械で何でも出來ると思ふのは間違で、最後の仕事はすべて人の手を要するものであります。損得にかまはず、仕事に一心を打こんでするから、本當に立派なものが出來るのです。どんなものでも、死んでもいゝといふ心持、夢中になる瞬間に、はじめて思通りのものがしあがるのであります。これは豆腐屋の話でありますが、毎日やみなしにして、一年中作つてゐながら、形も味も同じといふものは出來ない。又これでいゝと思ふ樣な味は中々ない。祕傳とか何とかいふが、それは實に一寸した機微に存するもので、教へる譯にゆかず、習ふ譯にゆかず、實にむづかしいものだ、といつてゐました。習字でも毎日習つてゐて、同じ字がかけず氣に入つた字もかけない。すべて物は生命を打こむと共に、一代で出來なければ子に孫にといふ樣に、持久策を講じなければ成功はしないものであります。それで、暖簾をわけるといふ事は、實にむ

づかしいことで、例へば東京中に三吉野は多いのですが、鹽加減砂糖加減が皆違ふし、又味が皆いゝと極つてもゐません。昔は年期奉公して、丁稚から見なれ聞なれ、數年の後やう〳〵そのこつを覺えて、はじめて分家格になつて、暖簾をわけてもらつてゐたのですが、この頃は金錢での賣買だ、といふことですから、暖簾も信ずる譯にゆかないことになります。これはその仕事その名前を汚すものではありますまいか。この頃は又、役人生活の足を洗つた人が、一時金で商賣を初めるのが流行つてゐる樣です。商賣は誰にでも出來るものだと考へてゐるらしいのですが、然しどんな仕事もまねで出來るものではありません。先仲賣から物を買取つて、一割かけて賣るとして、それを多少なり薄利にして見たところで、もと〳〵目がきいてゐないのだから、品物の選擇を誤る。仲賣が又それを萬々承知して、うまいことをいつて置く。それでは、いくら勉强したつもりでも、繁昌する筈がありません。商人は形だけではありません。その仕事に對する愛が、長年月の間に、目をこやしてくれるのであります。

昔の制度では商でも工でも主人と雇人との關係は、教へる人と習ふ人との關係でありました。親と子といふ風になつてゐました。子は又後で親になる。然るに今の處では、使ふ人と使はれる人とは、大體に於て、いつまでもそのまゝ違つた位置に置かれます。その點、職業意識の上に大なる差違を來したのは、やむを得ないかも知れません。然し主人と雇人とか、資本家と勞働者とかいふけれども、畢竟相對的の存在であります。いづれも己の長所を發揮して、人としての喜を感ずべきであります。但既に相對的である以上、一方が不當のことをして、他の屈從を強るといふことになれば、そこに破綻を來すのは、やむを得ない事でありませう。かやうなことは、他の場合にもあり得ることであります。私の學校の卒業生に、某名優門下にゐる人があるが、金力を持たず、後援者のない爲には、その天稟も認めてもらへない。自分が品位を下し、操行を破ることのないといふだけを承知して、特色を發揮し得ないのを許して戴きたい、といつてゐました。何の職業にも、さういふ惱が伴ふものかと、今更に情なく感じます。

今朝は、河崎なつ子氏の「お神さんの振袖」を面白く讀みました。文章もきびきびと、誠に嬉しい筆つきでありました。要は婦人に經濟力がある時は、他人にも本當に盡すことが出來るものだといふ説でありました。女性が美しき人形視されてゐた原因は、確かに經濟力を持たない關係から來るものでありませう。農業とか個人經營の商業とかいふものは、いふ迄もなく、それを一家の職業としてゐたもので、男女を問はず老若を論ぜず、その職業に服するの光景を有してゐて、それを又當然のことゝ認めてゐました。下層社會に於ては、今迄とても、所謂共稼が多かつたのです。さういふ人達は事實上、男女同權で、いづれもが快い朗らかな生活を營んでゐたものであります。然し大體に於て、外觀上幸福に見えなかつた爲、人はこれを憐憫の眼を以て見てゐました。近年迄妻を外で働かせることは、男の恥辱と考へてゐた人が多數でありました。然るに人としての自覺が女性の心をゆすぶつてから、考のある女性はまづ經濟力を求めようとしました。

その唯一の方法として、職業婦人が出現したのであります。處で同じく職業婦人といつても、能率からいつて、その仕事が女性でなければ出來ないものと、女性の方がいゝものと、いづれでもいゝが、賃銀のやすいだけいゝからといふものとあります。性質からいふと、堅實なものと不健全なものと、卽各自の惠まれた才能技術によつて立つものと、然らざるものとあります。今一つ下つては、我から人格を無視して、動物界に墮したる所謂籠の鳥と、自由勞働者と自認する闇の花とがあります。いづれにしても、今は職業ばやりの世の中で、有閑有產階級の汚名?を雪がんが爲のものと、己が力量を試さん考のものとが、所謂生活資金を得んとするものゝ領域に侵入してゐる觀があります。從つて割合に遊戲氣分で、化粧品商吳服商の利潤を助成してゐることが多くて、社會が女性によつて與へらるべきものが、あまり表れてゐない樣なのは、再考を要する事であります。女性の職業戰線進出については、大なる意義があります。血眼になつて相爭ふ世界に立つて、それを和げ、柔しい手であらゆる罪惡を掃ひのけて、美しい潤ある樂土を作りあげることが、その本體であります。個人の都合はこれに對し、第二義になるべきもので、もし本來の目的が達成し得られず、場合によつて一層俗化し惡化する樣ならば、靜かに家を守る事の方がいくらいゝか知れません。

私は母親が職業を持つことを、子供にとつて不幸なことゝ、明言するものであります。子供の樂園に、母が常に影を見せないといふことは、いかに物足らぬものでありませうか。單にそれ位のことでなく、家庭の女王がゐなければ、子供はどうして立派に育つて行くでせうか。衣食住に又精神の上に、絕えざる注意が拂はれなければ、子供は本當の意味で育つてはゆきません。これは理想論かも知れませんが、然しそれを本當とすべきは、爭ふべからざる事實であります。して見れば婦人の中でも、特に母親に對しては、他の方法で、經濟力を與へなければならないものであります。いつでありましたか、妻の月給制度といふことが問題視され、隨分華やかに論議されたと思つたが、今は下火になつてしまつた樣です。

それから、夫の所得は半ば妻の所得であるといふ説も唱へられた様でした。かういふ重大問題が、なぜ一時の線香花火式になつてしまふのか、誠に了解に苦みますが、好意を以て解決を計らんとするものと、又好題目として論ずるものとの差はあつても、結局これが第三者の叫で、當事者は遠慮して、そのことに意見を述べないから、白熱化する處まで行かないのでありますまいか。私も亦局外者の一人でありますが、この機會に自分の考を述べて、世の母親の一考を煩したいのであります。前記の二説の中、月給制度は、雇ふ人と雇はれる人といふ言葉が聯想され、一種の水くさゝを伴ふ様です。尤、諸會社銀行の如く、主體が家といふものであつて、夫も妻も共にその家に盡すものとして、月給を受けると見ることが出來ないこともありますまいけれど、然し、銀行利子か借家の家賃かで生活してゐる人の外は、事實上それは夫の勤勞所得金であつて、それを又、妻が夫に對する奉仕の結果與へられるといふことになります。これは共同作業の一人として、忍ぶべからざる屈辱の様にも思はれます。從つて私は、後の説を執りたいと

思ひます。夫の地位名譽によつて、妻に或待遇が與へられるといふのは、妻の協力を認めるからであります。同時に、夫の勤勞所得は、又妻と共同の所得であります。月給袋を前にし、協議せられたる豫算によつて各費目を分ち、夫の小遣、妻の小遣とわけるといふことは、新家庭などには相當に行はれてゐることで、それはさほどむづかしい事ではない様であります。たゞ所謂倦怠期などになると、お互が面倒くさがつて、そのまゝにしてしまふかも知れません。夫の小遣は夫が自由に使ふ様に、妻の小遣は妻が自由に使ふ。それでは足りないといひ出せば、誰の收入だつてありあまつてゐるものはありません。母性としての勤を正しく盡しながら、しかも經濟的金力を持つことは、かうして出來ることだと思ひます。尤もお神さんの振袖を快適に振り得たのは、外に出ての働の結果ではなく、一家の主婦として、十二分に盡された上であります。家に居て子供の世話をしながら出來る仕事は、母親の内職として、誠に都合のいゝものでありませう。序ながら申そへたいことがあります。妻が職業婦人として、月收何がしかを得る時、普

通の場合、それは妻の餘分の所得と見る人があるが、これは間違ではないでせうか。夫の所得が家の所得若くは妻の所得とすれば、妻としても同じく、自分の所得は同時に家の所得で、夫の所得でなければなりません。總收入の多少によつて豫算の割宛通所分することが、その場合の最正しい所置であります。かくして夫の又妻の、自由にすべき金額が定まつた時、その支出法については、互に助けあつて、最正しいと信じ、且最効果的と信ずる方法をとるべきでありませう。多くの場合振袖はおろか、留袖だけも中々振れないものでありますが、然し、少しでも他の爲に盡し得たらは、それは量でなく質として、喜ぶべきものでありませう。夫の死後、財産の半を公共事業等に献じた、などゝいふ記事を見ますと、羨望の極ではありますが、無資産のものには眞似は出來ないことであります。

男子は社會の表面に立つて、國に盡すべきもの。その爲それ〴〵の職業を持つのが當然であります。女子も係累なきもの、又は次代の國民養成の餘暇を割き得

るものは、内に外に適當に、生産方面に盡すべきことはいふまでもありません。さういふ風に職業を持つ人は、定められた若くは習慣上の職業服がある譯であります。精神勞働でも、筋肉勞働でも、職業は神聖であり、尊ぶべきものとするならば、同時に職業服は尊ぶべきものであります。然るに眞に職業の尊さを理解し得ざる人は、同時に職業服を輕蔑します。東京に於ける女教員の方々は、多くの場合袴を穿つてをられません。他の都合もあるかも知れませんが、大多數は他人から先生と見られるのがいやなのだといふことであります。半被股引はいつの間にか、シャツ、ヅボンと變つてゐます。仕事の上で本當に不便だといふのならば仕方がありません。私は古典的な考を以ていふのではありません。いづれでもいゝものならば、前の通してゐたらと思ふのであります。ハッピーコートは單に外國の流行の爲にのみ作られたものではありません。あの服裝によつて、在來の勞働者氣質、義俠に生きたその面影が、思ひ浮べられますし、又その氣質は當然繼承してゆきたいものであります。先形を作るといふことは、淺薄かも知れません

が、あやまりがないのであります。それ〴〵の職業が、容貌に表れてゐれば、そこに不安がありません。インチキ商賣は、そこに於て立ゆかなくなるのであります。（九月十八日）

私の運動競技觀

或自動車運轉手が私に申しました。「銀座あたりに出ると、交通整理の信號が丁度自分の體内の一活動の樣に、自分の頭に映ります。何かが目の前を飛んで來た時、すぐ瞑目すると同じ樣に、トマレの信號は、眼を通して頭に行く暇もなく、もう手がその命に從つてゐるのです」と。これは實に味ふべき言葉と思ひます。運動競技はそれ自身が、或目的を達するばかりではなく、その結果として、身體の均齊、刺激に對する敏捷さが、又我々に役立つものでありませう。球が飛んで來た時、受けるにしても避けるにしても、それ〴〵頭の活動と動作との間に、密接な關係を持ち得るといふことが、隙のない人を作りあげるのでありませう。私はそこまで競技が鍛練せられる樣に望むのであります。そして又、延てはその訓練によつて、良心の命令に迅速に正確に服從し得る人が作らるゝことを切望致し

ます。然し運動禮讃は既に他數の人によつてなされてゐます。私は運動競技に對する自分の希望を掲げると共に、私としての側面觀を述べたいと存じます。

日本人の身長が、歐米人に比して矮小だといふことが、明治維新以後、一の重大問題となりました。對等の交際をする爲には、一般の教育程度が高くならねばならぬと同時に、身長も高くならねばならぬ。さういふ目で見渡すと、亞細亞大陸の人達も、歐米人と比して遜色のない位、堂々たるものだ。獨この小島國の我々の貧弱さは何といふことか。これではならぬといふ處から、體操だ運動競技だと皆が騒ぎ出しました。無論體操とか運動競技とかは、他にも立派な目的がありませうけれど、とにかく體質體格と共に、身長が問題になつたのは事實であります。我々の坐つてゐるのが惡いのだ。全部椅子式にしなければいけない。子供は足をなげ出させよ。人前だつて何だつて、これが衞生といふものだと。さう騒ぎ立てゝ五十年の年月は過ぎました。男子は無論のことですが、女學生の身長の伸びたのには實に驚かれます。娘と並んで歩いてゐる母親は、我娘の姿を見上げな

がら感心してゐます。處で翻つて再考して見ませう。なぜ矮小なのがいけないのでせう。胴體の長さは內外人に殆んど差違がないのです。問題は足の長さであります。だから恰好が惡いぢやないかといひますが、然しその標準はどこにあるのでせう。美學の方の黃金律でもあるのでせうか。この頃は又、足を並べて見せる商賣がある想ですが、その信條はどこにあるのでせうか。私は獨で考へて見ます。なぜ足は長くなければいけないのでせうか。東海道五十三次を徒歩したのは日本人であります。そんな場合、歩幅の狹いといふことは、どれだけ不都合を來したのであるか。重力の關係からいつて、重い頭と內臟諸器官を藏する胴體とを、しつかりとさゝへて行くのに、細い長い臺と太く短い臺と、どちらが安全かを考へて見ませう。次には四肢の長さが、心臟の活動に、相當負擔を增させるものではないかを考へて見ませう。腦貧血は長の高い人に多いのです。血液循環の整調なる人は根氣がいゝのです。馬の足は競馬用には大切ですけれども、普通長いといへば胴をいひます。日あたりのいゝ處にある植物は、丈が低く、日陰の

はひよろ〳〵してゐます。この間「過量の砂糖を攝取すると、骨質が輕石狀になり、軟弱になり、著しく長くなるし、鹽類を與へると、骨骼が頑丈となり管狀骨の長いものが、却つて短くなる」といふ或醫師の發表を讀んだ時、私の想像に學理的の裏書を得たことを、私は非常に嬉しく感じました。それには又「身長の高さは、都會の衞生思想の發達、運動熱の旺盛に歸してゐるが、事實はその反對で、身長の高い子供に、病氣の多いことはいふ迄もない」と書いてありました。ひよろ長い身體になると、體操の必要が起つて來ます。スポーツの必要が出て來ます。自然に任せて、適當の勞働をすれば、衣食住のすべての調節によつて、チャンと身體が壯健になります。その上寒氣に堪へるといふ樣な、精神的鍛練が施されます。それこそどんな辛苦にも打勝ち得る身體になります。昔の人は、武士でも農工商の人でも、毎日の仕事が精神の鍛錬であつてそれが又身體上に影響を與へ、病氣をも征服する意氣を持つてゐました。靜坐も坐禪も劍道柔道も、精神を第一としたものであります。先精神を健全にすれば、從つて身體が健全になり

ました。謙讓抑制克己によつて、作りあげられた身體は、體操の必要、ダンスの必要を感じなかつたのであります。丁度食ふ爲に働くものと、働く爲に食ふものとの相違であります。

物理的にいへば物は使へば減ります。然し生理作用は、使へば使ふほど力が增してきます。手の掌に煙草の吹殼をのせることが、度重なれば、皮が堅くなつて使用し易くなります。足袋は破れますが、跣の生活はだん〳〵馴れて、苦痛を感じません。細工物をすれば、手指が一層鋭敏になります。運動すれば血液循環がよくなり、內臟器官が活動します。然し無制限に力が增すことは出來ないから外部に働けば內部がぬけます。食後直に考事をすると、胃が痛みます。肉體の活動が多ければ、精神的能力が少くなります。食事中は血液が內臟の方に多く行くので腦の方がお留守になります。それと同じことで、いつも〳〵肉體を使つてゐると、腦が空になる習慣がつきます。植物の枝葉が繁りすぎると、花が小い。トマトの芽をつめると、實が大きくなる。スポーツによつて體格がよくなれば、

肉慾が旺盛となります。それを抑制する爲には、一層強い精神力を要します。昔の僧侶の生活は、靈と肉との戰であつたでせう。心身相關の理もさることながら、心身相剋といふことも、同時に考へなければなりません。かう考へると、青年の肉慾を抑制せしむる爲に、運動を奬勵する理由が一寸解らなくなります。又運動によつて、エネルギーを消耗させるといふなら、それは一つの損失であつて勿體ない樣な氣もします。只氣持を轉換させて、考へる暇を與へないといふ解釋が、正しいものではないでせうか。とすると運動でなくとも、否ごまかしをしなくても、眞正面から、精神的鍛錬によつて、抑制した方が、もつと〳〵よさ相に思はれます。但困難に堪へ得る力を養ふのであるといふことも聞きますが、然し困難に堪へ得る力が養はれたとしても、それは體力であつて、精神力ではありませんから、すぐ辛抱强い人になつたと見るわけにはゆきません。私の見る處によれば、運動家は男女とも、性質が淡白單純で、竹を割つた樣、けれど、くひたいのみたい。ほしいものは取る。いやなものは捨てるといふ風で、忍耐克己などは

認められない樣です。反省の餘裕なく、危險をも忘れて、動物的に露骨になります。物を考へるとか、しんみりするとかいふことがない。ねばり强い精神は、スポーツによつて出來るものではありません。偶々精力家で、訓練服從等の美德を備へてゐる人があるなら、それは靈肉の戰の擧句、靈が肉以上の力を持ち、完全にそれを征服し得た人であります。さういふ場合にはじめて、スポーツマンシップが出來上るのであります。劍道柔道は、讀書習字と共に、武士道精神を作りあげる効果を持つてゐたものでありました。立派な武人は立派な精神を持つてゐました。昔は人を作ることを先にし、今は動物を作ることを先としてゐます。

一にスポーツ二にキネマ。實に大變な世の中になつたものであります。そして分業の一つかも知れませんが、運動が商賣になりました。大學を卒業して、百二十圓の月給をもらつて、廣告に使はれてゐる大男があります。これが非常な人氣者になつてゐます。何の爲に勉强したのか解りません。それでも學校では、相當

な人を出したつもりでゐる樣です。又銀行に雇はれてゐる人があります。何々課に屬してゐながら、算盤は持てない、仕事はしない。何とかチームといふと、すぐ出かけてゆきます。眞面目な人はこれを見て悔しがりますが、有象無象は羨しがつて、さういふ人が通ると大歡迎、はては、あつちの横町こつちの廣場で、眞似がはじまる。遠慮會釋なく通行人に球をぶつつける。どこにスポーツマンシップがあるのでせう。

私は或二人の人を知つてゐます。一人は官吏遺族扶助料で生活してゐる人の子で、成績は中程で、來年大學を卒業することになつてゐますが、歸宅しては母の傍で手傳をするといふ親孝行振で、何をしても間違のない人と思はれるが、學校でも認めてくれませんし、仕事を探してゐるが中々ありません。一人は同じ學校で二番の成績、酒は飲む女遊はする。實に出たらめの人ですが、野球界で評判の男の爲、奉職口も極つて、嫁も出來かゝつてゐます。この二人について考へて見ますと、カンニングをして、先生の御機嫌をとつて、運動選手になつてゐれば

奉職口はふるほどあつて、幸運が待つてゐるといふことになつて、甚寒心に堪へません。會社銀行の重役連は、さういふ點をもつと考へてほしいと思ひます。

（九月十九日）